
シークレットゲーム ~ BEST OB THE PAIR ~ 仮想エピソード

桐島 成実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットゲーム ～BEST OB THE PAIR～
仮想エピソード

【Nコード】

N2013N

【作者名】

桐島 成実

【あらすじ】

どこか違う状況、何かおかしいゲーム。そして提示された不可解な条件。

強制的に参加させられた14人のプレイヤー達は、ペアで構成された上、手錠を掛けられた状態で眠られていたのだ。

そして当人達の意味とは無関係に、最強のペアを決定すべく、ゲー

ムの火蓋は切って落とされたのだ。

悲劇ではなく、喜劇といえるこのシナリオ。その行く末を予想出来るものは誰もいなかった・・・。

スミス『やあ！みんな集まってくれてありがとう』

第1話「最強ペア決定戦!？」（前書き）

本作の「シークレットゲーム」BEST OF THE PAIR
R 仮想エピソード」は、本来のゲーム設定から大きくかけ離
れていますので、ご了承ください。

又、他のエピソードで見受けられる残酷な表現は、されておりませ
ん。ただし、ハチャメチャな内容は多分に含まれています・・・。

第1話「最強ペア決定戦!？」

シークレットゲーム ～BEST OF THE PAIR～ 仮
想エピソード

第1話「最強ペア決定戦!？」

総一「ぐう」

??「・・・いち、そういち・・・!」

総一「ん、んん・・・?」

誰かが語りかけてくるが、総一は目を覚まそうとしない。心地よいメロディーの様に感じられた声は、次第に大きくなっていく。

??「起きなさいってば!総一!!」

総一「うわつとお!」

大声で総一の名を呼ばれた当の本人は、思わずガバツと身を起こす。

??「やっと起きたのね、総一」

総一「・・・ん？優希か・・・」

暫くぼうつとしていた総一だったが、頭の回転が始まると同時に、驚きに目をカッと開く。

総一「って！うわああ！？」

突如情けない声を出しながら、目の前に立つ優希の前でひっくり返り、大の字になる。

桜姫「何よ？突然人の顔を見て驚くなんて」

総一「だ、だ、だ、だって！お、お前！死んだんじゃ・・・」

桜姫「うん、そうよ」

うろたえ続ける総一に対し、桜姫はさも当たり前のように、さらりと言つてのける。

総一「な、なんだ！これは・・・夢か??」

桜姫「夢じゃないわよ。ホラ、私の足」

桜姫はそう言つて自身の足元を指差す。

総一「あゝ、ああああっ?!」

一歩間違っていたら、きつと総一の腰は抜けていたかもしれない。
なぜなら、桜姫の足元は透けており、完全な幽霊と化してしたのだ。

桜姫「こらあつ。いつまでも驚いてないで、周りをみなさいな」

桜姫に促され、一度考えを打ち切った総一は。辺りを見渡して、今自分が置かれている状況に気がついた。

総一「な、なんだ？ここは・・・？」

そこは一面コンクリートで塗り固められている建物だった。どうい
うことかと考えあぐねていると、すぐ近くに居た別の人が、気さく
に話しかけてきた。

??「やあ、どうやら目が覚めたようだね」

総一「あ、あなた達は・・・？」

こっちに向かってきたのは2人だ。

葉月「ああ、僕の名は葉月。そしてこちらが・・・」

文香「陸島文香よ。・・・どうやら、私達と同じ境遇みたいね」

総一「境遇？」

文香「だってホラ！腕に手錠がついてるし」

文香にそう言われ、初めて気がついた。文香と葉月。そして総一と

桜姫、それぞれに金属製の手錠がはめられていたのだ。

総一「コレは、一体・・・？」

首をかしげる総一に、葉月は複雑な表情を浮かべた。

葉月「僕たちも、コレが何を意味するのか分からなくてね。正直困っているところなんだ」

葉月はそう言つて手を軽く動かす。すると金属のそれが触れ合つて、かるい音が響いた。

桜姫「とにかく、ここから出たほうがよさそうですね」

そう提案する桜姫。それに異論はないようだった。

文香「そうね。ひとまず行動してみましょ。ええとキミは・・・」

総一「ああ、俺の名前は総一です」

桜姫「私は桜姫優希といいます」

2人は丁寧にお辞儀をした。

葉月「そうか、総一くんに優希さんか。これから宜しく頼む」

その言葉を最後に、部屋を出た総一達一行。その間、総一はどうしても疑問に思っていたことがあった。

みんな、幽霊の優希を目撃しても、何も言わないな。気づい

ていないだけなのか・・・？

・
・
・
・
・
・

長沢「おっ！どうやら他の連中も居るようだぜ！」

高山「長沢。お前の言った通りになったな」

総一達があちこち探し回った結果、他のプレイヤーと遭遇する事が出来た。

手塚「オラ！引張るなっつーの！腕が痛いだろうが！」

漆山「そ、そうは言ってもだなあ」

どうやら彼らは同じ境遇のようだ。寡黙そうでツワモノそうな男と、生意気そうな少年。それとチンピラ風の青年と、いかにも暑苦しそうな中年男。

長沢「だあーれが『生意気そうな少年』だって？」

高山「・・・長沢。ナレーションに文句を付けるのはよくないぞ」

漆山「だ、誰が暑苦しそうな中年男だ！失敬な！」

手塚「人の話、聞いてたか？オッサン」

各々が好き勝手に話しているのを、総一は半ば啞然としてその様子を見ていた。

葉月「な、なんだか賑やかそうな人たちだね」

文香「そ、そうね」

何はともあれ、これで総勢8人ということになる。

桜姫「でも、こんなに総勢居て一体何が・・・あら？」

全員がいぶかしんでいる所に、突如スポットライトが点灯し、ある一点を照らし出す。

スミス『やあ！みんな集まってくれてありがとう』

突然、スミスが現れた。画面上ではなく。

桜姫「ちょ、ちょっと！どうして画面上の存在であるあなたが、ここに存在してる訳！？」

桜姫は驚きつつ、鋭いツツコミを入れる。いや、幽霊であるお前が言うか？と総一は心の中で思った、が口には出さなかった。

スミス『これを見てくれたみんなの要請を受けて、この世に誕生した、ジャックオーランタンのスミスだよ』

そう言って、くるくると可憐に回るスミス。

麗佳「誰がいつ、要請したって言うのよ!？」

渚「カボチャさんは、お呼びじゃないですう」

またまた、人が沸いて出てきた。そして矢継ぎ早に非難の罵声?を浴びせる。

スミス『何言ってるんだよあゝ（怒）ボクが居たから、過去のゲームが盛り上がったんじゃないかあゝ』

渚「そのせいで、私がどれだけ苦しんだことが、あなたには分からないでしょう?？」

言い合いを始めた彼女達を止めたのは、意外にも手塚だった。

手塚「あのな!いいから先進めてくれよ。話が進まねえじゃねえか」

少し苛ただしニューアンスを含めた手塚。

スミス『あゝ、そうだね。えっと、ジャジャーン!!今日みんなに集まってもらったのは他でもないっ!』

スミス『実は、今回行われる【最強のペア決定戦!】の参加資格を得ることが出来たんだあゝ』

長沢「はあ?なんだそりゃ」

スミス『手錠をしてると思うけど、それがペアの証。ちなみに手錠の輪っかの所に、それぞれトランプの絵柄を模しているから、それ

もペアの証』

高山「・・・たしかに、模様が刻まれているな」

スミス『はてさて、最強のペアは一体どの組なのか！？それではゲームの詳細を・・・』

手塚「オイオイオイ！ちよつと待ちやがれ！」

突然、すごい剣幕で怒鳴り声を挙げる手塚。彼は何か不満を持っているようだ。

手塚「何でよりもよつてこんなオッサンとペアなんだ！？今までのエピソードから考えて、高山の大將か、せめて長沢のガキだろ！普通」

漆山「こ、こんなオッサン・・・。て、手塚くん！？そ、それはないんじゃないか！？」

手塚「うるせえ！テメエなんざ、例の年増女とでも組んでりやいだろ！？」

郷田「へえ？年増女つて、一体誰のコトかしら？」

手塚「ギクツ！・・・あー、いや、誰のことだろうなあー」

視線を宙にさ迷わせる手塚。彼をそうさせたのは、ひとえに身の危険を強く察知したからだ。そう、まるで鬼神のごとく、殺気が。ゴゴゴゴッ！

咲実「同感ですっ！なんで、私達がペアなんですかつ！？」

すると咲実が姿を表す。

葉月「キミは……。そうか、キミと郷田さんがペアなんだね？」

ずっと後ろで成り行きを見ていた葉月は、ようやく話に加わってきた。

咲実「おかしいですっ！？普通、総一さんと私がペアのはずじゃないんですか！？」

咲実はスミスにそう詰め寄る。

スミス「あゝ、でもねえ、エピソード『5』『6』では影薄いし、『7』では完全に悪役だし……」

咲実「だからって！私をこれ以上貶めないでくださいっ！？」

スミス「だって、人気ないし……」

ピシッ！！

一瞬、スミスと咲実との空間に、亀裂が入った気がした。

スミスの呟きは、かつて手塚が口にした年増女以上の殺傷力があつたに違いない。

咲実「そうですか……。では、悪役らしくっ！！」

咲実がポケットから、大きめのフライパンを取り出した。そして柄を握って、横一閃にスイングした！

パッカーン！！

気持ちのいい弾ける音が、通路のあたりに響いた。

スミス『あゝれ』

はりか彼方へと吹き飛ばされるスミス。しかしさすがというべきか、彼の司会者魂は並大抵ではなかった。

スミス『と、とにかく！ゲームスタアートオー……』

声が聞こえなくなるその時まで、開始の合図を出し続けたのは、さすがというべきだろう。

かりん「くう！今度こそ、今度こそ生き残ってみせるんだからあ……！」

優希「私！まだまだ活躍するんだからっ！」

手塚「いや、お前ら。会話に入る隙間がないからって、無理やり割り込むんじゃないねえ……」

総一「それより、優希が幽霊ってコト、まだ誰も突っ込まない訳？」

何はともあれ、最強のペアを決定すべく、総一達の前途多難な戦いが、本人達の意味とはまるで無関係に、幕を開けたのであった。

・
・
・
・
・
・

参加登録ペア一覧 全7組)

- ・ エーススピード【御剣総一】&エースハート【桜姫優希】
- ・ ツークローバー【葉月克弘】&ツィダイヤ【陸島文香】
- ・ スリースPEED【高山浩太】&スリークローバー【長沢勇治】
- ・ セブクローバー【手塚義光】&セブダイヤ【漆山権造】
- ・ ジャックハート【姫萩咲実】&ジャックダイヤ【郷田真弓】
- ・ クイーンダイヤ【北条かりん】&クイーンハート【色条優希】
- ・ キングスピード【綺堂渚】&キングハート【矢幡麗佳】

第1話「最強ペア決定戦!？」（後書き）

いつものステージに、謎のゲームが出現。果たして彼らは様々な珍（？）試練を乗り越えることが出来るのでしょうか？

次回は第2話「踊るマリオネット」総一達はこれから、ゲームという荒波に揉まれていくことになります。乞うご期待！（^^）／

P・S

真奈美「渚あゝ、頑張つて」

かれん「ファイトオーだよ！お姉ちゃん！」

バリバリ・・・

かりん「何、外野でまったりとお菓子食べながら応援してるのよっ！」

明海（葉月の娘）「私のセリフここだけ・・・ぐすんっ」

第2話「踊るマリオネット」(前書き)

第2話「踊るマリオネット」

作

者：桐島成実

参加者ペアー覧 残り7組中7組)

『ハイパーゴールデン幼馴染カップル 〽死さえも乗り越え愛を培う〽
〽・・・エーススピード【御剣総一】&エースハート【桜姫優希】

『ベストバイプレイヤーズ 〽脇役からの脱却を目指す!〽
〽・・・ツークローバー【葉月克弘】&ツードイヤ【陸島文香】

『危うき凹凸コンビ 〽失わない冷静さ・躊躇なき攻撃は最強の武器となる〽
〽・・・スピード【高山浩太】&スリークローバー【長沢勇治】

『ビート・ザ・ジョーカーズ 〽刹那快樂主義の脅威を知れ!〽
〽・・・セブンクローバー【手塚義光】&セブندイヤ【漆山権造】

『リアルキラークイーンズ 〽真のヒロイン&女王様は私!?〽
〽ジャックハート【姫萩咲実】&ジャックダイヤ【郷田真弓】

『チャームングフラワーズ 〽不器用さと愛嬌で苦難を乗り越切る!〽
〽クイーンダイヤ【北条かりん】&クイーンハート【色条優希】

『ローズプリンセス くら若き乙女は魅力のカード!??』
『キングスPEED【綺堂渚】&キングハート【矢幡麗佳】』

司会進行役 ……【スミス】

特別ゲスト ……【北条かりん】&【麻生真奈美】

第2話「踊るマリオネット」

スミス『なんか、上の方に物凄く派手な名前が連なっているけど……。ま、いいかあ！』

スミス『やあっ！また会ったね、そのキミ達！今日のゲーム進行はマスコットキャラであるボクが担当するよ！』

かれん「特別ゲスト役を仰せつかった、北条かりんです。よろしくお願いします！」

真奈美「同じく麻生真奈美ですー」

スミス『一応、ルールを説明しておこうかな？今回はペアでの対決。総勢7組のペアによる戦いだよっ！』

スミス『それぞれのペアに異なった条件が課せられて、制限時間内にそれらをクリアしないと、罰ゲーム！っていうのが、今回のルールなんだよねっ！』

かれん「条件の内容によつては、相反する条件があったりします。そうなりますと、どちらかのペアが確実に脱落する事になります」

真奈美「これらのルールを計4回繰り返す事になりますー。つまり、4つの条件を総計24時間掛けてクリアしないといけないんですねー」

スミス「そういうことっ！ところでお2人方。今回優勝しそうなペ

アって、一体誰だと思う？」

かれん「うーんと……。本音を言えばお姉ちゃんを後押ししたいけど、本命はやっぱり総一＆桜姫ペアかな？」

真奈美「私は、やっぱり渚かなあ？麗佳さんと組んでるから、結構強いかもあ？」

スミス「なーるほどお。おおっ！？さっそく参加者のみんなが動きだしたみたいだよっ」

・
・
・
・
・

総一「ええと、こつちの方角でいいんだよね？」

総一達2人は通路を確認しつつ、ゆっくりと目的地へ目指していた。

桜姫「うん、そうよ。……。なんか、こうしてるといつも登下校していた日々を思い出すわね」

総一「ああ、そうだな」

2人は手錠を掛けられている事もあってか、互いに腕を組み合っていた。その様は恋人同士そのものだった。

今までの登下校では、お互いに気恥ずかしいのか腕を組む事まではしなかった。それだけにどこか新鮮な感じがしていた。

桜姫「あら？この扉、開かないわね？」

通路の壁に備え付けられていた扉は取っ手がなく、電子ロックがかけられているようだ。

総一「他に目的地に行けそうな道筋はないな。やっぱりココを通過して、旗を取りに行くしかないよなあ・・・」

総一達に最初に課せられた条件は、【3時間以内に所定の場所に掲げられている赤い旗を取りに行くこと】だった。

総一「弱ったなあ。無理にこじ開けようとして、かえって取り返しがつかなくなるかもしれないし・・・」

桜姫「あ、じゃあ、私が取って来てあげよっか？」

総一「どうやって？」

言いたい事が理解出来ない総一。それに気づいたのか、桜姫は言うより先に行動に移す。

おもむろに片手を壁に突き出す桜姫。すると抵抗らしき抵抗もなく、あっけなく壁に手が埋まってしまう。

桜姫「ホラ！私幽霊だから、壁をすり抜けたり出来るのよね」

総一「あ、ホントだ」

つい先ほど桜姫の幽霊を目撃した時はひどく驚いた総一だったが、その現実を受け入れたのか、さほど驚いた様子はなかった。

桜姫「それじゃ、私行つて来るわね」

総一「ああ・・・」

自身の手首に掛けられていたはずの手錠をすり抜け、電子ロックの扉さえもすり抜け、あっという間に姿を消した。

総一「ま、待てよ？この展開どこかで・・・」

その考えに行き着いた結果、総一はガラにもなくガタガタと震えだした。

そ、そうだ！なんで気づかなかったんだ！！ゆ、優希が、交通事故に遭った時もそうだったじゃないか！？

俺の誕生日のお祝いにと、近くのケーキ屋まで向かった優希は帰らぬ人につ・・・！

総一「ま、待て！優希！？待ってくれ！！」

総一の叫びも、壁に遮られてしまう。また俺は、優希を助けられないのか！？その絶望感が、罪の意識が、総一を押しつぶす。

総一「俺を置いて行かないでくれえゝ！！？」

必死で電子ロック式の扉を叩きつける総一。するとそこに、

桜姫「うるさいわね、総一。静かにしなさいよ！」

総一「優希！？つて、うわああああっ！？？」

優希は、扉から顔の先端だけを外に出している状態だった。その様はまるで、顔の部分だけポツカリと穴を開けられた部分に、人が顔をおっつける看板のような再現だった。

総一「ぶ、無事か！優希！？」

扉から全身を出した桜姫の手には、赤い旗が握られていた。

桜姫「大丈夫よ。ホラ、このとおり」

総一「そ、そうか。良かった・・・」

桜姫「途中色々あったけどね。トゲトゲだらけの天井が降ってきたり、大きな鉄球が坂を転がってきたり。まあ、全部すり抜けちゃったけど・・・」

総一「優希・・・」

ギュッ！

桜姫「な、何！？いきなり抱きついたりして！」

総一「もう2度と離さない。お前1人になんかしないから・・・」

桜姫「嬉しい言葉だけど、ちょ、ちょっと苦しいってば、総一」

こうして2人は、総一の気が済むまでしばらく抱き合っていたのであった。

・
・
・
・
・
・

仲良く歩調を合わせている総一達とは違い、互いに自分のペースで歩もうとする別のペアがあった。

手塚「オラ！さっさと歩けつての、オッサン！」

漆山「い、いててっ！ひ、引張らないでくれ、手塚くん。手首が痛いじゃないか！」

手塚達2人もまた、総一達とはほぼ同様の条件をクリアする為、目的地を目指していた。

手塚「・・・ん？コイツあ、電子ロックか？」

そしてこれまた総一達と同じ障害物が待ち受けていた。ただし、位置的に総一達とは別の電子ロックなのだが。

手塚「操作パネルがあるな。押してみるか」

扉のすぐ横の壁に設置されたそれは、1～10までの数字が表示された液晶ディスプレイだった。

漆山「あ、ああ」

漆山の返事を待たずして、それらを適当に押してみる手塚。しかし軽い電子音が響くだけで、何も変化が起こらない。

手塚「やっぱ無理か」

何度か押してみるが、やはりピクともしない。それに少しイラだったのが、手塚が無茶な提案をする。

手塚「いつそのこと強行突破してみるか？」

漆山「どうやって突破するんだね？」

手塚「んあ？えー・・・」

扉を壊せそうなものは手元にはない。正直なところ、勢いで言っただけだった。

手詰まり感の手塚だったが、ごまかし気味に扉のまわりを調べていると、ふとダンボールが床に置かれているのに気がついた。

手塚「お？こいつは・・・」

漆山「何かみつかったのかね？」

手塚はダンボールのフタを破り捨てる。すると中に入っていたのは、何かなんだか分からない電子機器の数々だった。

手塚「な、なんだあ？コイツは・・・」

手塚には何かなんだか分からなかったが、意外にも漆山は理解したようだ。

漆山「おおっ、コイツがあれば、ロックを解除出来るかもしれん」

手塚「なにっ！マジか!？」

漆山は電子機器の数々を取り出し、それらを手際よく操作し、そして15分ほどたった後。

プシューッ

ロックがかかっていたはずの扉は、すんなりと開いたのだった。

手塚「ほーう・・・」

これには手塚も素直に感心していた。

手塚「やるじゃねえか、オッサン」

漆山「ふ、ふん、見直したか？」

自慢げに誇る漆山。それが滑稽に映ったのか、手塚は満面の笑みを浮かべていた。

手塚「ああ、初めてアンタと行動を共にしてよかったと思ってるぜ」

漆山「う、ぐむう・・・」

手塚「オッサンが唸つても、ちつともかわいくねえつての」

漆山「や、やかましいっ！」

実際の所、漆山の持ち得る技術力は相当なものだ。電子機器のみならず、物を作ったり細工をしたり、器用さと想像力を求められるそれらは、もはや職人技と言ってもいいかもしれない。

はた迷惑と言える難儀な性格さえ直せば、きっと出世したに違いないだろう。言い換えれば、それだけ損をしているわけだが……。

手塚「何はともあれ、これで先に進む事が出来るな」

と言って、扉の一步向こうに足を踏み出した、のだが。

手塚「なんじゃ、コイツは……」

心底呆れた感のあるトーンでそう呟く手塚。

タイル式の一面の壁に、石鹸やシャンプーにリンス、そしてこじんまりとした浴槽と、それらの類は、ここが浴室だという事を鮮明に示していた。

手塚「何でよりもよって浴室なんだ、オイ！」

手塚はなぜか傍に居る漆山に突っかかる。

漆山「お、俺に言わないでくれっ!？」

手塚「わざわざ浴室に電子ロック式の扉なんて大業なモンを取り付けたってのか！？バカじゃねえか！？」

本来なら主催者側の人間に言うべき事なのだが、影も形も見当たらないので、完全に漆山に飛び火していた。

手塚「つと、こんなことやってる場合じゃねえな」

と言い、あたりを調べ始める。が、どこからどう見ても不自然な点はない。浴室として見れば、の話だが。

手塚「強いて言えば、この窓をくぐるしかねえのか・・・？」

その窓は小さく、一人がやっと渡れる程度だった。しかもその先は闇に閉ざされており、何があるかが見えない。

手塚「暗くて向こうの様子が見えねえな。ってなわけで、漆山のオッサン、お先にどうぞ！」

漆山「ほえっ！？」

まるで理屈になっていない理由で漆山を先導させる手塚。その表情はニヤツと笑みを浮かべていた。

漆山「な、なんで俺が・・・！」

手塚「なあに、簡単なコトさ。重たいオッサンを不安定な上から引張るか、下からしっかりと支えるか、その違いってワケさ」

もちろん、実際の理由は言葉どおりではない。要は毒味役を押し付

けているだけだった。

当然のことながら、漆山の態度には不満がありありと浮かんでいた。が、有無を言わせない勢いで、ほとんど強引に押し上げる。

漆山「いてっ！いててっ！！」

そして悲鳴を無視し、力づくで漆山を押し込もうとする手塚。その甲斐あつてか、なんとか窓を潜り抜ける事に成功した。

手塚「何か足を引っ掛けるところはねえか？」

漆山「あ、ああ、足場が狭そうだが、なんとか」

手塚「よし、・・・ひとまず危険はなさそうだな。よし、オッサン」

言いかけた手塚だったが、突如手錠が強く引張られる。

漆山「うわああああっ！？」

手塚「なんだとっ！？」

足場を踏み外したのか、真っ逆さまに下に落ちる漆山。その勢いに引張られ、手塚まで窓の向こう側へと身を投げ出された。

ザバーン！！

すると、何か水の様な物に、全身を浸からせた。

漆山「ぷはあっ」

手塚「げほげほっ、ば、バカ野郎！・・・」

思わず怒鳴りつけそうになった手塚。だが、直にまわりの壁に触れた事で、それが何かがわかった。

手塚「あん？」

それは、つい先ほど触れた感触と同じだった。

漆山「な、なんだこれは・・・？浴槽か？」

漆山の言つとおり、そのものズバリ浴槽だった。

手塚「浴室の窓を挟んでまた浴室だと！？・・・本当のバカじゃねえのか、ここの連中！？」

集合住宅でも、どこかのアホな設計士でも、こんな訳わからん造り方はしねえぞ！何の為に窓があるんだよ？？

つてか、そもそもこんな所を通行するヤツあ、普通いねえよっ！

漆山「ブクブクブク（だから、俺は知らないんだ！八つ当たりしないでくれえ！？）」

漆山の顔面をお湯に沈めて、怒りを露わにする手塚。が、そんな自分さえもアホらしくなったのか、途端に漆山を解放した。

手塚「あゝくそっ！？ツツコミどころが多すぎて、もう何がなん

だかわからねえよ・・・」

手塚はこれまでにないほど、脱力感というものを体感していた。

漆山「し、死ぬ・・・！死んでしまう・・・」

この後、様々な怪奇な仕掛け？の数々に遭遇した2人だったが、何とか目的の黄色い旗を手に入れる事が出来た。

と、いうより危険があつたというよりも、あまりにも意味不明な展開ばかりが待ち受けていたの過ぎないのだが・・・。

・

・

・

麗佳「はあ・・・、まさかこんな展開になるなんてね・・・」

渚「でもでもお、いつもの展開と比べれば、ずいぶんとマシなんじゃないかなあ？」

麗佳「あなたはお気楽ねえ・・・」

一方、麗佳&渚の2人は、ずっと続く通路を進み続けていた。

麗佳「ええと、所定の場所に行き、そこに掲げられている緑色の旗をとればいいのよね？」

渚「そうよぉ。けど、何かが待ち構えてそんな予感」

麗佳「それは間違いないわね」

そんなやり取りをしつつ、通路を進んでいくと、これまで全面コンクリートだった壁が途切れ、突如開けた場所へとたどり着いた。

麗佳「ここは・・・公園、かしら??」

渚「みたいだねえ」

地面が土のそこは、室内に造られた様々な木々があり、整備された遊歩道なんかもあり、まるでどこかの公園に散歩に来たような錯覚を覚えた。

麗佳「色々と無駄の極みね・・・」

しかも上の方にはご丁寧に空が描かれており、太陽までしっかりと存在していた。

麗佳「さすがに本物の太陽じゃないよね。映像、か何かかしら？」

渚「うん、どうだろ？」

麗佳「けれど日光まで照らされているし・・・。っと、そんな事考えてる場合じゃないわね」

先に急がなければ、そう思い数歩先に進んだところで・・・。

麗佳「きゃーーーーっ!!!?!」

渚「ど、どうしたの!? 麗佳ちゃん!?!」

駆け寄る渚にすがり付きつつ、麗佳はある1点を指差す。

麗佳「く、く、く、クモっ!!!?!」

差した指の方に、木の枝と枝の間に巣くっているクモの姿があった。

激しく動揺する麗佳に対し、渚はいつもと変わらない表情を見せる。

渚「あ、ホントだ!・・・えいつ!えいつ!」

渚は何を思ったか、地面に落ちていた枝を拾い、おもむろにクモの巣をいじり始める。

渚「ぐる、ぐる、よし!出来たっ」

クモの巣をかき回し、あろうことかクモ自身を糸でがんじがらめにしてしまった。

麗佳「・・・・・・・・・・・・・・・・」

完全に思考が止まってしまった麗佳の手を取り、再び歩き出す。

渚「これで良しっ　じゃあ先いこっ」

麗佳「・・・もしかして」

クモより目の前に居る女性の方が末恐ろしいような・・・。そんな事を考えずにはいられない麗佳だった。

・
・
・
・
・

渚「あ、小屋はっけ〜ん！」

公園を進み、生い茂った森にたどり着き、その中へと入っていった麗佳達。

木々の間をすり抜けるようにして歩いていくと、目の前に突如小屋が姿を現した。

麗佳「場所としては、ここで正しいのよね？」

渚「うん〜」

ふと周りを調べてみると、看板らしきものが小屋の入り口の前に立てかけられていた。

麗佳「・・・この店の名前を言ってはいけません・・・？」

看板には確かにそう書かれていた。

渚「うーんと???どういう意味だろ?」

麗佳「さ、さあ・・・?」

考えても答えは出ず、ひとまず小屋の中に入ることにした。

麗佳としては、イヤな空気が漂うこの中には入りたくなかったが、そうも言っていられない。

麗佳「行くわよ?」

入り口の扉を開け、中の様子を窺う。そこは何一つ置かれても飾られてもいない質素な通路で、真っ直ぐに向かって続いていた。

麗佳「・・・行くしかないわよね」

渚「悩んでもしょうがないよぉ。行動あるのみっ!」

麗佳「あつ、ちょっと、コラ!・・・もうっ、考えなしに動こうとするんだから・・・」

ぶつぶつと文句を言いつつも、渚の後に続く麗佳。しばらく歩いていると、再び扉に差し掛かった。

麗佳「扉の前に看板・・・?ええと、西洋料理・・・」

その先を言おうとして、ハッと口をつぐんだ。

麗佳「確か、店の名前は言っちゃいけないのよね」

麗佳は、先ほど見た看板を思い出し、渚の方に目配せする。

ちなみに、目の前にある看板には、西洋料理店・山猫軒 と書かれてあった。

渚「うん。安直な引つ掛けだよねえ」

麗佳「・・・そ、そうね」

看板を尻目に、扉を開いて先へと進む。

麗佳「また看板・・・」

扉の先へと進むと、先ほどと同じ長い一本道と、扉の前の看板が置かれてあった。

渚「今度は何だろう？えーとお、当軒は料理に時間がかかりますから、ご承知下さい だって？」

麗佳「は？どうして？・・・と言うより、聞きたい事は山ほどあるんだけど」

麗佳はいぶかしんでいたが、渚は全く気にしてないようだ。

渚「料理の仕込みは、時間がかかるのよあ」

麗佳「あなたの料理好きは知ってるけれど、やっぱり変じゃない？」

やっぱりどころか、目一杯変なのだが、そんな麗佳の抗議を完全に

無視し、渚は扉を開く。

麗佳「はあ、またなのね・・・」

と思っていたのだが、今度は先ほどとは状況が違っていた。

扉と看板は同じなのだが、その脇に柄の長いブラシと、等身大の鏡が設置されていたことだ。

麗佳は看板に目をやると、やはり考えなしに先に進もうとする渚の首根っこを掴んで引張る。

渚「きゃ！は、離してえ」

麗佳「先行くんじゃないってば！引き返すわよっ！」

渚「ふえ？」

麗佳「思い出したわ・・・」

先ほどから頭に引っ掛かっていた疑問。それが一つの答えとなって導きだされた。

お客さま方、ここで髪をきちんとして、それから履き物の泥を落としてください

そう書かれた看板を渚がじいーと見つめる。

渚「これは・・・？」

麗佳「あんだね！これは 注文の多い料理店 って作品名で」

渚のボケぶりに、思わずそう口走ってしまった麗佳。最初の看板の事を思い出したのは、事が起こってからだった。

ガタン！ガタン！！

麗佳「きゃあっ！？」

突如体勢を崩してしまう麗佳達。それもそのはず、突如小屋の床そのものがゆっくりとではあるが傾いているのだ！

渚「わあゝ！扉と壁がきれいに崩れていくゝ」

まるで仕掛けていたかのように、幾手を遮っていた壁と扉がきれいに外れ、床の傾きと自重に沿って、床を滑り落ちていく。

残ったのは床のみで、坂と化したその先にあるものを見て2人は驚愕する。

麗佳「な、何よ！あれ！」

渚「大きなおナベに、揚げ物の油みたいだねゝ」

渚の言うとおり、人が揚げ物にされるにちょうど良い大きさの鍋に、油が注がれていた。

麗佳「のん気に解説してないで、床が傾ききらない内に逃げるわよっ！」

思い切り出口に駆け寄る2人だったが、その先から落ちてくる壁や扉、看板の残骸が通路を塞ぎ、思うように脱出出来ない。

そうこうしている内に、床はもうだいぶ傾き、支えきれずに倒れた身体に力を入れて、床に踏ん張るのが精一杯だった。

麗佳「くううっ！」

渚「あ、揚げ物にされるのは嫌ですうっ！？」

そんな2人の悲鳴も空しく、床はさらに傾いていった。

麗佳「だ、ダメ！このままじゃ・・・！」

もはや身動き出来なくなった2人。渚は首だけを後ろに回し、鍋の方を見やる。

渚「あれ・・・？」

するとある物が目に付いた。それは先にナベの方に落ちてしまった扉や壁の残骸だった。

それらは満たされた油の中に浸されているのだが、揚げられることも発火して燃え上がることもなく、ただ油の中に沈んでいるだけなのだ。

渚「でも、この熱風は間違いなく近くで火が燃えている事の証明」

渚の目つきが変わった。それは料理人としての鋭い目なのだろうか？

つまり、このナベに火は掛けられているが、まだ温度が十分に上昇していないのだと見抜いたのだ。

渚「ってコトはあゝ、きっとこうすれば!」

麗佳「え!？」

麗佳は驚きに目を見開く。渚は身をよじり、ポケットから2つに分割された機関銃らしき物を取り出したのだ。

それを片手で器用に組み立て、ナベの方へと狙いをつける。

渚「年季がかったレアものの銃!けれど、威力はお墨付き!」

などと好き勝手言いながら、銃弾を放つ。

ズドドドドドッ!!

派手な音と共に、銃弾はお椀型のナベの、比較的油の浅い部分に向けて連射する。

ズルズルッ!!

ナベに開けられた穴をつたって、温まりきっていない油が流れ出す。

ズドドドドドッ!!

次々と放たれる銃弾によって、ナベ全体に穴が空いていく。

シューウウウツッ!!

ナベの下の方から火が消える音がして、吹き付けていた熱風が次第に収まっていく。

渚「よぉーし、任務完了ー!」

麗佳「じゃないわよっ!!」

事の次第を見届けていた麗佳は、渚の無茶ぶりに、思わずそうツツコむ。

麗佳「あ、あなたねえ!? 油の温度が思ったより低かったから良かったものの、一歩間違ってたかどうかのよ!?」

もしかすれば、文字通り 火に油を注ぐ 結果となり得たかもしれないのだ。

渚「まあ、結果オーライってコトでえー!」

そして悪戯っぽく微笑む渚。その笑顔には曇り一つない。

麗佳「うう、前途多難だわ・・・」

麗佳の嘆きは、そのまま現実のものとなっていくのであった・・・。

・

• •
• •
• •
•
•

第2話「踊るマリオネット」(後書き)

そんなこんな7組のペアは脱落する事もなく、それぞれ違う色の旗を手に入れたのでありました。・・・そのところは全部紹介するとキリがないので省略します(汗)

咲実「そんな！私達の活躍は無視ですかっ！？」

葉月「おやおや。僕達の出番は、まだなのかい？ずっと待機してたんだが・・・」

今回は第3話「次第に(間違った方向に)過激さを増して」第一の条件をクリアし、次は第2の条件が出現！今回出てこなかったペアも登場します。乞うご期待(＾@＾)

ちなみに・・・

スミス『あゝあ、総一&桜姫ペアはすりつぶして、手塚&漆山ペアは煮込んで、渚&麗佳ペアは揚げ物にする予定だったのになあ』

真奈美「この豚肉美味しいよねえ」

かれん「うんっ　味付けもサイコーですね」

優雅に食事をしながら2人はモニターを見ていた。そこには、かりん達の様子が映っていた。

かりん『ちよつとアンタ達！この状況を見て、よくもまあ食事が出来るわねっ！？』

優希『ううゝ・・・』

一体2人に何が・・・？詳細は次回！？

第3話「戦いは（間違った方向に）過激さを増して」（前書き）

第3話「戦いは（間違った方向に）過激さを増して」

作者：桐島成実

参加者ペア一覧 残り7組中7組

・エーススピード【御剣総一】&エースハート【桜姫優希】・・・
幽霊でも活動中

・ツークローバー【葉月克弘】&ツィダイヤ【陸島文香】・・・和
気藹々と準備中

・スリースピード【高山浩太】&スリークローバー【長沢勇治】・・・
・クールなフリして一休み

・セブクロバー【手塚義光】&セブダイヤ【漆山権造】・・・
チヨイワルオヤジ風（失礼）に活躍中！？

・ジャックハート【姫萩咲実】&ジャックダイヤ【郷田真弓】・・・
相性最悪？最高？不明のまま苦戦中

・クイーンダイヤ【北条かりん】&クイーンハート【色条優希】・・・
・仲良く手をつないで移動中

・キングスピード【綺堂渚】&キングハート【矢幡麗佳】・・・あ
まりの条件に戸惑い中

司会進行役・・・【スミス】・・・いつも通り邪な笑いを浮かべてます

特別ゲスト・・・【北条かりん】&【麻生真奈美】・・・今回は傍観者を決め込んでいます

第3話「戦いは（間違った方向に）過激さを増して」

優希「うう〜」

かりん「どうしよう・・・」

とある部屋へとやってきたかりん達2人。彼女達もまた、自らの課された条件に困惑な表情を見せていた。

かりん「この、目の前に作られた豚肉料理を食べろ、っていうのが条件なんだけど・・・」

かりんはそう言って手に持っていた皿盛りの料理を前に出し示す。

その料理はとてもおいしそうで、誰でも簡単にクリア出来そうな条件ではあった。

だが彼女達は頭を抱えていた。もちろん、豚肉料理が嫌いなわけじゃない

く、毒が入っているのでは？という懸念がある訳でもない。

優希「この状況で、食べなきゃいけないの・・・？」

いつもの元気な優希の姿は失せ、完全に動揺している。

優希が料理の少し向こう側へと視線を変える。するとそこには、

（^@^）ブヒッ

(^ @ ^) (^ @ ^) ブヒッブヒッ

(^ @ ^) (^ @ ^) (^ @ ^) (^ @ ^) (^ @ ^)
(^ @ ^) (^ @ ^) ブヒッブヒッブヒッブヒッブヒッブヒッ
ッブヒッ

そう、大量の生きたブタが、あちこちに放牧されていたのであった。

かりん「ブタの集団の面前でブタ肉を食べる、・・・なんて恐ろしい罠なの」

目の前に居るブタ達は、皿に盛られた同類に気づいているのだろうか？そんなどうでも良い考えがよぎる。

するとそこに、天井に備え付けられていたスピーカーから、ものすごくほのぼのとした会話が聞こえてきた。

真奈美『この豚肉美味しいよねえ』

かれん『うんっ 味付けもサイコーですね』

優希「！」「、この声って・・・(汗)」

かりん「あ、あの2人いっ！！私達が直面している問題を完全にスルーしてくれちゃって」

かりんは衝動的に、スピーカーの横にある、かれん達が映ったモニター相手に怒鳴りつける。

かりん「ちよつとアンタ達！この状況を見て、よくもまあ食事が出来るわねっ！？」

(^@^)ブヒィ

優希「ううゝ・・・」

するとかれん達は、かりんが呼びかけているのに気がついたのか、食事しながら手を振ったりなんかしている。

かりん「こっちはアンタ達みたいに、暢気で陽気で無神経で、神経が図太くて非情で、周りの空気をまるで読んでいない冷血女じゃないのっ！！？」

かりんの生涯で、今までに無いほどの罵詈雑言の数々を連呼していたが、当人には聞こえてないみたいだった。

優希「ど、どうしよお」

かりん「ま、待って！何か方法を考えるから」

そう言つて、手を額に当ててしばらく考えていた所に、『周りの空気をまるで読んでいない』代表格が姿を現した。

スミス『やつほゝ！苦戦してるみたいだねえ？？』

かりん「！これだっ！？」

かりんは一体何を思つたのだろうか？突如目の前のスミスの力ボチ

や顔の部分を掴んで引っこ抜こうとする。

スミス『うわあああっ！？ボ、ボクは畑に埋まってる大根じゃないんだあゝ！！！！』

かりん「大根じゃなくて、カボチャでしょ！？」

スポツ！？

ものの見事に引っこ抜かれたカボチャの被り物？を、やはり何を思ったのか、それを優希の頭に勢い良く被せる。

ガボツ！！

かりん「これで視界を防げば、ブタさん達を見なくても食べれる！」

なぜこの考えに至ったのか、どうして他の有り余る選択肢を全て捨ててコレを選んだのか。誰にも、かりん自身も分かっていなかった。

と、いうより、かりんが代わりに食べれば良い、という考えをなぜ最初から捨てているのか？いや、恐らくかりんは気づいていないのだろう。

何はともあれ「優希＋スミス」という、一種の組み合わせが出来てしまったのだ。

優希「……………」

かりん「ゆ、優希・・・？」

突如動かなくなった優希の顔を覗き込もうとするが、カボチャに隠されて、その表情を窺い知ることが出来ない。

優希「ポピーーーーー！！？」

かりん「きゃあぁっ！？」

突如ロボットがオーバーヒートしたかの様に、蒸気を噴出す優希。それを呆然と見守っていると、

優希『とおー！！！！』

突然動き出したかと思うと、何やら決めポーズの様なものを決めだす優希。

優希『私の名前は優希 パンプキン！！地面の底から生えてきた、正義のヒロイン！！』

かりん「いや、ヒロインって・・・」

とてもそんな格好には見えない、と言おうとしたが、それを聞かずに、優希はただひたすらに続ける。

優希『ワルモノ達を見つけたら、この私が食べちゃうぞぉー！！？』

と、何かに目覚めた優希はそう言い残し、その場を素早く立ち去ろうとする。

かりん「いたっ！いたたたっ！！」

当然ながら手錠で繋がれているので、引張られるかりん。

この時になつて、よおーやく、自分の浅はかさを理解したかりんであつた。

・
・
・
・
・

麗佳「な、何よ、コレ！？」

渚「こ、こんなの嘘ですっ！？」

各々が持っているPDAの条件を見た2人は、あまりの内容にしばし呆氣にとられていた。

すると、備え付けられていた近くのモニターが突如起動し、画面上に新たなスミスの顔が一面に映し出される。

スミス2号『あー、もしこの条件をクリアできなかった場合のペナルティとして、キミ達の恥ずかしいあれや、これなんかを、キミ達の知り合いにバラまく事になっちゃうよ』

そして画面が何度か切り替わる。

麗佳「!?!いやあああっ!!やめて!!やめなさいよっ!?!」

顔を真っ赤にして、手をブンブンと振って猛烈に抗議する麗佳。

渚「い、意地悪ですよぉ!?!」

驚きに目を見開きつつも、彼女なりに反発する渚。

スミス2号『そうされなくなったら、制限時間内に条件をクリアする事だねえ、あと3時間ほどかな?』

赤面の2人を完全に無視し、言いたいことだけ言って、画面から姿を消す。

麗佳「くぅ……。し、仕方ないわ。か、覚悟を決めるしか」

渚「私、こんなの嫌ですぅ……。」

麗佳「私だつて嫌よ!?!でも、仕方ないじゃない……。」

戸惑いつつも、彼女達とはあるペアを探し出す。スリーの数字を持っているペアを。

.....

高山「これが条件か。・・・誰かと対峙せよ、という意味だろうか?」

高山も長沢と共に、PDAの画面を確認していた。そこに書かれていた条件は以下の通りだった。

【第2のゲーム開始より3時間以内に、紫の旗を取得する事】

長沢「旗は全員持つてみたいだしね。絶対そうだって!」

高山「ふむ・・・」

そんな2人の前に、別のペアが近付いてきた。

渚「あ、あのお、高山さん、長沢くん」

高山「むっ?」

麗佳「あなたたち、スリーのカードの持ち主よね?」

そう問いただされた高山達2人は、互いに視線を合わせ、話しても問題ない事を確認する。

長沢「ああ、そうだけど。何か用?」

その際、高山達は素早く2人の持つ旗の色を確認する。

その色は緑。どうやら高山達が探している旗の色では無さそうだ。

渚「あ、あのお・・・、実は、ですね・・・」

とたんに歯切れの悪くなる渚。高山はその様子から、何か不審な感があると読み取った。

渚「うう……。ボソボソ……」

高山「ん？」

麗佳「……ってわけよ」

そう締めくくるが、何を言っているのかはつきりとは聞き取れない。

長沢「はつきり言ってくれよ！姉ちゃん達」

麗佳「だから！あなた達を誘惑するのが私達の条件なのよっ！？」

半ばヤケになった麗佳は、赤面しながらそう答えた。

長沢「……はあ？」

当然ながら、その場の空気が固まった高山達2人。麗佳は勢いにまかせて、大胆な事を続ける。

バサッ！

なぜか麗佳達2人は、全身に布地を巻いていたのだが、2人はそれを脱ぎ捨てる。

長沢「！なにっ！？」

高山「ほう？」

その下には、あまりにも大胆な格好をした2人が・・・。

さすがの2人も、あまりの展開に最初驚きを見せたのだが、誘惑出てきているかと言えば、そうではなく。

高山「・・・・・・」

長沢「・・・・けっ」

渚「あ、あのお」

恥ずかしさを全力で隠そうとしている渚だが、誘惑している対象の2人に問いかける。

高山「・・・・なんだ？」

その高山は、遠くの方で壁に腰掛け、タバコをふかしている。その目線は渚達とはまるで別の方向にむけられていた。

その表情には変化がなく、照れているのではなく、本当に興味がないようだった。

渚「私達の為に振り向いてくれませんかあゝ??」

懇願する渚に対し、高山は目線を向けないまま答える。

高山「厄介ごとには巻き込まれたくはない」

そうキッパリ言い切る高山。

長沢「右に同じ」

隣に座っていた長沢も続く。

麗佳「ま、待ちなさいよ！？これじゃ、まるで私達がバカみたいじゃないの！？」

高山「恨むのなら、主催者側を恨むことだな」

長沢「右に同じ」

全力で恥ずかしがっている女性2人に対し、まるで無関心の男性2人。その様子は滑稽であった。

渚「私達って、そんなに魅力がないですかぁ？」

高山「さあな。よく見ていないからわからん」

長沢「右に同じ」

麗佳「い、いいからさっさとこっちに向きなさい！」

高山「指図される言われは無い」

長沢「右に同じ」

まるでコントの様な言葉のキャッチボール（ほとんど暴投？）は続く。

渚「あなた達は、男の子ですよねぇ？？違っんですかぁ！？」

高山「年は食ったが、一応な」

長沢「年は食ってないけど、右に同じ」

高山「第一、相手に困っているわけではない」

長沢「右におな・・・」

一瞬、長沢の思考が止まる。

長沢「・・・今なんて言ったの？オジサン」

高山「相手など、掃き捨てるほど居るということだ」

そう言いきって、タバコの煙を口から吐き出す。

長沢「え〜？・・・結構お盛んだっただな」

高山の変わりに、モニターと共に突如現れたスミスが答える。

スミス2号「実はそうなんだよ〜。ちなみに、高山さんのハーレム映像がコチラっ！？？」

モニターのスイッチを押す前に、高山の銃が火を噴く。

ズドォーン！！？

スミス2号「ぐおおおっ・・・」

その弾は見事にスミスの頭を貫通。そしてその場に力なく倒れるスミス2号。

短時間の内に、2体ものスミスが犠牲になってしまったのだ。

長沢「うわっ。もう滅茶苦茶だな、こりゃ・・・」

長沢の呟きを無視し、高山は腰を上げて立ち上がる。

高山「・・・時間だ。いくぞ長沢」

長沢「ああ、もうそんな時間か。じゃ、さっさと片付けるか」

そう言い残し、その場を立ち去る2人。残されたのは、固まったままの哀れな2人。

渚「私達って一体・・・」

麗佳「もう、お嫁にいけない・・・」

2人きりになって改めて、自らの恥ずべき行為を悔いたのであった。

そんな2人を通路の角から覗き込んでいる視線が一つ。

漆山「うおおっ！？極楽至極じゃあ」

それは漆山だった。一連の様子を見ていた漆山は、すっかり興奮しきっている。

漆山「も、もう我慢がきんっ！？さっそく彼女達をいただくと・・・」

もちろんゲームの参加者である漆山にも、パートナーが存在するわけ。

手塚「ちっ！もういいだろ？早く解除条件をクリアしにこうぜ？」

口では軽く言っているものの、力ずくで漆山を引きずっていく手塚。

漆山「ま、待ってくれ！今良い所なんだ！？」

手塚「ったく！あとでじっくり見りゃいいだろ！？条件をクリアした後にな」

漆山「うおおおおっ」

手塚「手錠に、騒ぎ立てるオヤジ。これじゃまるで、のぞきの現行犯で強制連行！ってか？まったく・・・」

やれやれと言わんばかりの手塚は、ターゲットである『2』の持ち主の所までたどり着いた。

手塚「待たせたな」

葉月「やあ。待っていたよ」

手塚たちを待ち受けていたのは、葉月、文香の2人であった。

手塚「おうおう、ちゃんと用意出来てるじゃねえか」

葉月達の前に並べ立てられているのは、ワインやウィスキー、日本酒やその他様々な種類のアルコール類だった。

それらが床の１点に並べて置かれていた。その数は１００本に迫る勢いだ。

手塚「一応確認しておくが、この酒類の飲み比べをして、先に酔いつぶれた方が負け、ということで間違いないな」

文香「ええ、間違いないわ」

手塚「に、しても相手が悪かったな。俺あ、意外とアルコールには強いぜ？」

文香「あら？私だって自信はあるわよ？」

そう言つて手を腰に当てる。これは自らをアピールする時の文香のクセだった。

葉月「僕はあんまりお酒には強くないなあ。漆山さんは？」

漆山「あ？ああ、俺は・・・」

手塚「弱いんだったな、確か。どこぞのエピソードで酔いつぶれて寝ていた、とかほざいていたしな」

漆山「むう・・・」

手塚「だから、オッサンが唸っても可愛くもなんともねえぞ」

漆山「ほ、ほっとけ！」

葉月「まあまあ、じゃあさっそく始めようとしようか」

それを合図に、各々のジョッキにワインを注ぎ込む。

文香「ワイングラスじゃないところが、風情がないわよねえ」

葉月「コンクリートの塊の中だしね。もっとうち夜景を見ながら・
」

手塚「んなこたぁいいから、とっとと始めっぞ」

そして1杯、2杯・・・10杯目に到達した。

量はともかく、すべてのアルコールの度数が高い為、必然と酔うのも早くなる。

手塚「うおお、結構キツイぜ・・・」

漆山「ふ、ぐ、彼女達の・・・、麗しい姿を見るんだあ！」

漆山も手塚の予想に反し、奮闘していた。恐らくさっきの渚達の姿を再び見ようと、必死で堪えているのだろう。

手塚「ったくよお、エロパワーだけは健在ってかあ？」

心なしかろれつが怪しい。

葉月「うむう、やはり歳かな？もう酔いが結構・・・」

文香「あらあらあ、もつと頑張んなさいよ、おじ様」

4人揃って完全に酔っ払いだ。

そして11杯、12杯と続き。

漆山「麗しの彼女達の・・・為。再びあの姿を・・・、見る、為、なん、だあゝ」

次々とジョッキに注がれる恐るべき悪魔の液体。それを飲み干しつつまるで呪文のごとく唱え続ける漆山。

そして13杯目、ついに脱落者が・・・！

手塚「ぐほおっ」

勢い良くウォッカを吐き出す手塚。そのまま床にひっくり返ってしまった。

文香「あらあ？でかい口叩いてた割に、たいしたことないのねえゝ」

手塚「こ、こんな・・・バカな。この、俺が・・・」

すると手塚の視線にあわせて、文香が何かを見せ付ける。

手塚「こ、コイツは・・・？」

ほとんど意識が混濁しつつ、それにヒントを合わせようとする。どうやら金属製の缶のようだ。

文香「実はねえコレ、アルコールがそのまま入っているのよねえ」

手塚「んだとお！？」

文香「でえ、これを事前にあなたが飲む酒に割り増ししてたってわけ」

飲む量に差が出ない様に、ペア別に同じ酒を分けて配列していた。

その内、手塚たちが飲む分に、アルコールを含ませたというわけだ。

手塚「ゴホコボツ！ん、んなのありかよお！？」

文香「ルール違反じゃないしく、というか、ルール自体無い様なモンだしねえ」

すると葉月も何かを取り出す。

葉月「僕はコレ。付き合いで同僚と飲む事があるからねえ。事前に酔い止め薬を飲んでいたってわけさ」

葉月と文香は、満足そうに笑顔を浮かべる。

手塚「く、くそつたれ・・・卑怯者がっ！？」

文香「卑怯者の筆頭に言われたくはないわねえ」

葉月「大人のズルさって、こうやって使うものだと思うよ？」

手塚「ぐっ、・・・漆山のオッサンは・・・」

漆山はいまだ奮闘していた。だがそれも14杯目で限界だった。

漆山「ぐおおおおっ！！」

泡を吹いてひっくり返る漆山。きつと夢の中で再び麗しい彼女達と再会している事だろう。

葉月「僕たちの勝ち、と見ていいようだね」

すると手塚たちが倒れこんでいる床が突如開き、落とし穴に真つ逆さまに落ちていった。

手塚「ぬおっ！？」

淵に指を引っ掛け、しぶとく堪えようとする手塚だったが、あまりの酔いに、頭に思い切り衝撃が走った。

更に漆山の落ちる重さに引張られ、耐え切れずにそのまま落ちていく。

手塚「畜生おおっ！？このオッサンと組むと、ロクなことがねえ！！・・・」

それ以降、彼らが再び葉月達の前に姿を現すことはなかった。

文香「あらあ、落ちちゃった」

まるで意に介していない文香。

葉月「ううむ」

途端にふらつく葉月。それを反射的に文香が受け止める。

文香「だ、大丈夫かしら？おじ様」

葉月「む、ふふふふつ。妻も娘もここには来ないだろうし。どうだい文香くん、今夜一緒に・・・」

文香「やあだあ！おじ様のスケベえ」

この絡み酒の応酬はしばらく続いたのであった。

・
・
・
・
・
・

郷田「ホラ！私の手に捕まりなさい！」

一方の郷田&咲実ペアは、落とし穴の罠に咲実がハマッてしまい、手錠の影響でかろうじて落ちずに済んでいる状態だった。

咲実「す、すみません！郷田さん！」

郷田「いいから、早くっ！！」

郷田にとって、咲実の存在はどうでもよかったが、このままでは自分まで落ちてしまうと考え、ひとまず助けることにしたのだ。

咲実「はあっ、はあっ」

なんとか落とし穴から脱出する事に成功した咲実。

郷田「全く、しっかりしなさいな！」

郷田は強い口調で叱咤する。

咲実「ご、ごめんなさい」

言われた咲実は、律儀にお辞儀をしながら謝罪する。

郷田「紫の旗は落としていないでしょうね？」

咲実が持っていた旗が、今も手に握られている事を確認すると、体勢を崩してだらしなくなる。

郷田「はあ、やれやれ。何で私がこんな事をしなくちゃいけないのかしら」

本来ならば、数少ない休日好きに過ごす予定だったはずなのだ。

会社のカリスマ社長という立場上、まとまった休日を取れる事は実

に少ない。

仕事熱心な彼女は度々休む事を良しとせず、他の社員が休みであっても1人仕事をしているほどなのだ。

郷田「今頃、仕事の事は忘れて、家でビール片手にゆっくりしてるはずだったのに・・・」

ひととおり愚痴をこぼしていた郷田だったが、そんな事をしている場合ではないのは重々承知。再び行動に移るのも早かった。

郷田「ええと、私達のクリアしなくてはならない条件は確か、『青の旗を持っているペアから、旗を奪う事』よね？」

すぐ傍に居る咲実にそう確認する。

咲実「はい。間違いありません」

郷田「ただ、これは私の勘だけど、その青の旗を持っているペアも、同じ様な条件ね」

咲実「と、いいますと？」

郷田「そのペアは、私達の旗を手に入れる事が条件、だと思うわ」

確証がある訳ではないが、ゲームとしてはそんな展開が最良だろう。

郷田「っと、どうやら勘は当たったみたいね」

咲実「えっ？」

郷田の発言に、驚きの声を挙げる咲実。郷田の視線はある1点に向けられていた。

高山「ふむ、奇襲は失敗か」

その声の主は、青い旗を持っている高山だった。その手にはマグナム式の拳銃が握られており、その銃口は郷田達に向けられていた。

長沢「あゝあ、やっぱこんなコソコソと近付くんじゃなく、一気に突撃した方が良かったじゃんかよ」

隣には長沢も居て、やはり高山と同じ拳銃を手にしていた。

高山「距離があつては奇襲にはならん。もっとも、反響し易いこの狭い通路では、成功する方が稀だ」

咲実「え！？え！？」

郷田「逃げるわよ！！」

動揺して首を左右に動かしている咲実の腕を、郷田が掴んで走り出す。

長沢「あ！待ちやがれっ！！」

高山「慌てるな。予定通りだ」

高山の言うとおり、これは想定範囲内の事だった。それを示すかの

ように、郷田達が逃げた方の通路から、突如ガスが噴出す。

郷田「なっ！？こ、これは催涙ガス！？」

それに気づいた時は、もうすでに少し吸い込んだ後だった。

咲実「こぼっ、こぼっ！？」

2人揃って咳き込んだ為、バランスを崩してその場に倒れこんでしまふ。

長沢「これで袋の鼠だな」

高山「近付きすぎて、ガスを吸わない様にな」

長沢「わかってるって！」

長沢は持っていた銃を構え、郷田に照準を合わせる。

そして引き金を引こうとした瞬間

??『その悪党！！待ちなさあーい！！！？』

突如高山達の後ろの方から、そんな声が聞こえてきた。

長沢「な、なんだ！お前はっ！？」

優希 パンプキン『弱き者の助けを聞いて飛んできた、正義のヒロイン！優希 パンプキンとは、私のことだあー！！！！』

長沢「・・・はあ？」

途中から何を言っているのか、長沢には理解出来なかった。

郷田「な、何なの、あなたは！？ひょっとして、バケモノ！？」

優希 パンプキン『ちがぁーう！！私の名は優希 パンプキンなの
！！』

高山「おばけかぼちゃか？」

優希 パンプキン『だから、違うって言ってるでしょ！？』

咲実「助けを聞いて飛んできた。って、私達呼んでないんですけど・
・」

優希 『うるさあい！？ここは私の出番なのっ！』

かりん「はあっ、はあっ、っ、付き合わされる私の身にもなって・
・」

こうなった元凶である事を忘れたかりんは、完全にヘトヘトになっていた。

・
・
・
・
・

第3話「戦いは（間違った方向に）過激さを増して」（後書き）

高山&長沢、郷田&咲実の戦いに乱入した優希達。一体この後どうなってしまうのでしょうか？

次回は第4話「もはや常識さえも破壊して」完全に舞い上がっていくプレイヤー達。果たして彼らと彼女達は、いずこへ向かうとしているのか、乞うご期待

この頃、舞台裏では・・・

葉月「む、ふふふふつ。妻も娘もここには来ないだろうし。どうだい文香くん、今夜一緒に・・・」

文香「やあだあ！おじ様のスケベえ」

葉月「うーむ、久しぶりに若い頃を思い出し・・・んん？何か殺気が・・・！？」

明海（葉月の娘）「おとととさ〜ん！！？」

そこには、表情こそ微笑んでいるように見えるものの、額には青筋を立てて、黒い炎の様なものを身にまとっている葉月の娘が・・・！

この後、しばらく修羅場と化してしまいました・・・。

第4話「もはや常識さえも破壊して」（前書き）

第4話「もはや常識さえも破壊して」

作者：桐島成実

参加者ペア一覧 残り7組中6組

『ハイパーゴールデン幼馴染カップル』エーススピード【御剣総二】
& エースハート【桜姫優希】・・・緑の旗の持ち主を探索中

『ベストバイプレイヤーズ』・・・ツークローバー【葉月克弘】&
ツードイヤ【陸島文香】・・・明美（葉月の娘）が葉月に対して
（以下略）

『危うきストライク・スリーコンビ』・・・スピード【高山浩太】
& スリークローバー【長沢勇治】・・・おばけカボチャ？に狙われています

『ビート・ザ・ジョーカーズ』・・・セブンクローバー【手塚義光】
& セブンダイヤ【漆山権造】・・・無念の脱落、敗者復活はあるのか！？

『リアルキラークイーンズ』ジャックハート【姫萩咲実】& ジャックダイヤ【郷田真弓】・・・なんとなく影が薄い気が。存在感をアピールできるか！？

『チャーミングフラワーズ』クイーンダイヤ【北条かりん】& クイーンハート【色条優希】・・・チャーミングどころか、怪物化しち

やってます（汗）

『ローズプリンセス』キングスPEED【綺堂渚】&キングハート【矢幡麗佳】・・・苦難の連続に、心が折れそうな気が・・・。

司会進行役・・・【スミス】1号は顔を引っこ抜かれ、2号は銃殺。3号以降の出現はあるのか！？

特別ゲスト・・・【北条かりん】&【麻生真奈美】・・・今の所、食事のシーンしかないような？

第4話「もはや常識さえも破壊して」

優希 パンプキン『弱き者の助けを聞いて飛んできた、正義のヒロイン！優希 パンプキンとは、私のことだぁー！！！！』

そう高らかに宣告し、その場に居る2組のペアに立ち向かう優希パンプキン。

決まったぁあっ！！と内心喜んでいたのは、実際の所、当の本人だけだった。

長沢「色々言いたい事はあるけど、ヤバそうな感じはするな・・・」

高山以下郷田と咲実も、長沢と同意見だった。

優希 パンプキン『やい！その悪党！私が来たからには、これ以上の悪事はさせないよっ！！？』

長沢「悪党って、俺達のことか？」

高山「悪事？まだ何もやっていない筈だがな」

そんな事はお構いなしに、優希は謎の構えをとる。

優希 パンプキン『私が開発した、召喚術！！』

かりん「しょ、召喚術??な、なによそれ・・・」

優希 パンプキン『我が僕たちよ！我の声に答えよ！スーパーゴールデンポーク!?』

ブヒィ~~~~~（^@^）（^@^）（^@^）（^@^）（^@^）（^@^）
（^@^）（^@^）（^@^）（^@^）

咲実「な、なんなのですかっ！これは!？」

突如現れたのは、先ほど優希達が対峙していたブタの集団だった。

かりん「って、このブタ、さっきあの部屋にいたブタじゃないっ!？」

私達の後について来たの?でも、いくつものノブのついたドアを通り過ぎたはず・・・。

そんな数々の疑問をスルーして、お構いなしに突っ走る優希だった。

優希 パンプキン『さあーて！悪党どもをこらしめてあげなさいっ!』

（^@^）ブヒブヒッ（了解しましたあ）

優希の合図と共に、集団は揃って高山達に突撃していった。

（・・・@・・・）ブヒィ〜

高山「むっ、迎撃するぞ！長沢！」

長沢「あいよっ」

ズドドド！！ズガァーン！！

繰り出される激しい攻防、次々に打ち落とされるブタさん達。

（>@<）ブモォ（>@<）ブウー

優希 パンプキン『むむむう、このままじゃまずいかも？・・・それならっ！？』

再び何かを召還しようとする優希。

かりん「って、また何か出るの！？」

優希 パンプキン「いでよっ、我が同胞たちよっ！？」

郷田「・・・今度はなんなのかしら」

完全に呆れた様子の郷田をよそに、今度は床が開いて、そこから見慣れたスミスの集団が現れた。

スミス3号『呼びですか、隊長！？』

スミス104号『やっと表へ出られたぜえ』

スミス1億2000万号『右手のチェーンソーが唸っちゃっ』

スミス1丁目4番3号『さあ、ご命令を!!』

郷田「最後のは住所、かしら??」

現れたスミスの総数はおよそ50体。それは狭い通路のコンクリートを隙間無く埋め尽くした。

高山「形勢不利か・・・。引き揚げるぞ!長沢」

長沢「はいはい」と

そう言い残し、その場を立ち去ろうとする2人。

郷田「巻き添えを食らうのは御免だし、私達も引くわよ」

咲実「・・・・・・・・」

郷田「ちょっと!聞してるの!」

そう言つて咲実の肩をつかむ郷田。すると、何かを語るかのように咲実はずりりと話し出した。

咲実「私、このまま地味に終わるのはイヤです」

郷田「は?」

何を言っているの、という表情で咲実を見る郷田。しかし、咲実は意を決したかのように、スミスの集団に悠然と立ち向かう。

咲実「私のゼロ距離射撃、受けてみなさい!!」

そう宣言して取り出したのは、なぜか拳銃などではなく、やたら大きな筒状の黒い塊だった。

郷田「な、何よそれ？・・・！！」

黒い塊をまじまじと見つめる。すると、ご丁寧に武器の名称がプリントアウトされていた。

郷田「これって・・・ロケットランチャー！？」

なぜそんなものが！どこから取り出したの！？様々な疑問と驚きが交錯したが、そんな事よりも、もっと気にすべき事柄に気がついた。

かりん「全然ゼロ距離射撃じゃないし」

郷田「って！ツツコミどころが違うでしょう！？」

高山「室内戦向きじゃないな、あの武器は」

郷田「あなた達ねえ！危機感というものはあるのかしら！？」

長沢「あれって、重すぎ、デカすぎ、単発しか使えないし、個人戦じゃかえって不利だよな」

郷田「あー、もう！！私が変なの！？私が！！」

咲実「・・・私のゼロ距離射撃、受けてみなさい！！」

全く同じ台詞を吐いて、崩れた緊張感を立て直した咲実。

郷田「ま、ま、ま、待ちなさいっ！！そんな物をこの狭い建物の中でぶっ飛ばすつもり！？」

ガラにもなく動揺を表に出す郷田。それだけこの武器が強力だという事だろう。

下手をすればこの辺りをまとめて吹き飛ばしかねない武器。それを咲実躊躇もなく、狙いを定めてぶっ飛ばした！！

咲実「あつたれえっ！！！」

郷田「や、いやああっ！！！」

ヒュルルルル……

飛ばされた弾頭はゆっくりと弧を描いていき、そして、

ズゴゴゴゴゴッ！！！！

今までに無い爆発と共に、あつという間に視界が煙で塞がれた。

スミス3号「うわああああっ！？」

スミス104号「ようやく表へ出られたのにいっ」

次々と粉々に粉碎されていくスミス達。

スミス1億2000万号「俺たちじゃ、所詮ザコ扱ってわけかあ」

スミス1丁目4番3号『新鮮、安値、安心の、3拍子そろった豊富に野菜の数々。栄養も豊富に含まれています。ぜひ野菜は我がスミス農園にて』

郷田「・・・まさか、その住所みたいな名前は、農園の場所を示してるのかしら」

至極的確で隙の無いツツコミを入れる郷田。どうやら、わたわたと慌てるのがバカバカしく感じたようだ。

優希 パンプキン『むむむむうゝ！！こっとなったら・・・』

そこで優希は、なぜか傍に居るかりんの方を向く。

かりん「え！？え！？私！」

優希 パンプキン『かりんお姉ちゃんの必殺の特技！それは・・・』

かりん「え？え？必殺！？」

優希 パンプキン『実は、身体のパーツを組み替えて、真の姿に変身するのだあー！！』

かりん「私はバケモノかロボットの類なの！？」

優希 パンプキン『さあ、かりんお姉ちゃんの出番だよぉ』

そう言つて、無理やりかりんの身体を組み替えようとする無邪気な少女が1人。

かりん「いたい！いたたたっ！？いたいつてば！！」

優希 パンプキン『あれえ、おつかしいなあ・・・』

やはり不思議そうに首をかしげる優希。とはいっても、その顔は邪なカボチャそのものなのだが。

かりん「おかしいのは優希の方でしょ！？優希にこんな事吹き込んだのは一体誰なのよっ！？」

ちなみに、その類を吹き込んだのは優希の父親。そしてそれを全開モードに切り替えたのは、他ならぬかりんだったはず。

当の本人は、自分がスミスの顔を優希にかぶせた事を、綺麗さっぱり忘れていた。それに対する仕打ちなのだろうか？

優希 パンプキン『むう、仕方ない。なら今度は私が・・・！』

高山「まだ続くのか？」

優希 パンプキン『見て驚くな！私の必殺技、目からビーム！！』

ビィィィィッ！！

間髪入れずに、カボチャの目と口の部分から発射された光。それは高山達へと向けられた。

長沢「うわあっ！そんなのアリかよ！？」

高山「違う！右だっ！！」

瞬時に避けようとした2人だったが、互いに全く別の方へとジャンプしてしまった。

その反動で、身体の勢いが止められてしまい、手錠がピンと張られる状態となった。

ガキン！！

そこを、狙ったかのようにビームが通り過ぎる。

高山「くっ！手錠が切れたか・・・」

手錠のチェーンが真つ二つに切断された2人。

高山「だが、今の状況ではかえって有利か」

動きが制限されていた分、それが無くなればこちらにも勝ち目がある。そう高山は考えた。

優希 パンプキン『あっはっは！どうだ、まいったかあ！！』

高笑いをする優希。しかし、

ピロリンピロリンピロリン・・・

突如、あたりに響き渡るアラーム音。それは何かの警告を示している音だ。

優希 パンプキン『えっ？』

『あなた方は、ブタさんの前でブタ肉料理を食べるという条件を満たすことが出来ませんでした』

かりん「あ……。忘れてた」

頭をポリポリと掻くかりん。一方の優希が瞬時に固まってしまった。

『それでは、地獄の道へのご案内』

パカッ！

お約束のごとく、床一面が瞬時に抜け落ちた。それは手塚&漆山の時と同様だった。

優希 パンプキン『うわぁーん！！これからだったのに！！』

かりん「私、結局何しにここへきたんだろ……」

派手な演出？とは打って変わって、あっけなく落とし穴にハマった優希とかりんの2人。

長沢「俺達の勝利」

ピロリンピロリンピロリン！

長沢の台詞を遮って再び鳴り出したアラーム。

『あなた方はペアの証明である手錠を失ってしまいました。したがってペナルティが加えられます』

長沢「な、なんだとっ!？」

高山「ふうむ、隠されたルールがあったのか」

長沢「落ち着いてる場合かよ、おじさんっ!俺達の出番が消えちまったんだぜ!？」

激高する長沢とは対照的に、やはり落ち着いたままの高山。

高山「構わんだろう。むしろ、こんな訳の分からんやりとりは、俺達には合わん」

長沢「あー。言われてみればそっか」

郷田「・・・私も激しく同意したいところなんだけど」

いつそのこと、落とし穴に落ちた方が楽なんじゃないか、と郷田は心から思った。

高山「では、後は頼む」

ガタン!!

床が落ち、あっけなく落ちていく高山と長沢。残されたのは咲実と

郷田だけだった。

咲実「やりましたね、郷田さん！」

すると待ち構えていたかのように、達成感ありあけな感じで咲実が話しかける。

郷田「私、何にもやってないんだけどね」

咎めるような言葉とは裏腹に、何もしなくて正解だった、と暗に思っていたのだった。

咲実「このまま一気に主役の座を目指しましょう！！」

郷田「つまりは、このペア決定戦で優勝しろ？はあ、もう帰りたいわ・・・」

郷田の嘆きも、テンションが上がりきった咲実には通じないのであった。

・
・
・
・
・
・

優希が中心となって激しいバトルを行っていたが、別の所でも激しい攻防が繰り広げられていた。

麗佳「てえええいつ！！」

随分と気合の入った麗佳の雄たけびが通路に響く。

麗佳「喰らいなさいっ!! ツンデレらんらん ツインテールミ・ラ・ク・ル・ショット!!」

やたらと派手なネーミングと共に、なぜか麗佳のツンデレ画像がプリントされた麗佳専用の銃から、やたらとカラフルな七色の光線が発射される。

・・・どんな銃の構造をしているかはさておいて。

桜姫「なんのっ! 総一&桜姫の愛の抱擁バリアガード!!」

愛の形を示すハート型をした盾が、七色の光線を防ぎきる。・・・
どうやって発生させたのかは置いていて。

渚「や、やりますねえ」

と感心しつつも、渚も攻撃を開始する。

渚「私はコレ! 軍用18式大型機関銃!!」

総一「あ、味気ねえ・・・」

とたんに現実的な展開になった。微妙に空気を読んでいない気がするが、彼女らしくはある。

渚「強い女はコワイのよぉー!!」

ズガガガガガッ

総一「ならばコイツで、どこでもドアー!!」

ドラ もんのおなじみ道具を取り出し、ドアを開いて盾にする。そこに機関銃の弾が吸い込まれていく。

・・・色々おかしな点満載ですけど、この際スルーしておきましょう

総一「カッコ良いとはいえないけれど、結果よければすべてよし！」

桜姫「ところで、今の行き先ってどこ？」

総一「優希（大）の部屋!!」

何の躊躇もなく、そう答える総一だが、そこに桜姫の強烈なチョップが炸裂する。

桜姫「私の部屋の壁に穴あけて、どうしてくれるのよっ!!」

総一「あっ！言われてみればそうか」

総一は何も考えずに桜姫の部屋を指定したらしい。・・・とはいっても、彼女自身既に亡くなっているはずなのだが。

渚「ケンカはいけないんだよぉ〜！」

やたらと呑気なのはいつものことだが、渚は追撃を仕掛ける。しか

し、総一達も黙ってはいなかった。

総一「次はこっちの番だ！！極寒の地で降り注ぐ大吹雪、行き」

と言って再び怪しげなドアを開く。

ヒュウウウツ！！

すると冷氣と吹雪がなだれ込んでくる。

麗佳「ええいつ！それなら」

などと激戦を繰り広げる双方のペア。互いに拮抗していたが、それも決着がつく時が来た。

桜姫「これならどう？100の視点、相手を見抜く洞察力！！」

総一「つて、そりゃなんだ！？」

桜姫「あなた達の弱点、見抜いたり！！」

そう高らかに宣言する。

麗佳「な、なんですって！？」

桜姫「麗佳さん！あなたは最近、腕のあたりの脂肪を気にしていませんね！」

麗佳「なっ！？ど、どうしてそれを！」

桜姫「それでこの間、脂肪を取る為にいくつかのダイエット器具を購入しましたね？」

麗佳「うっ・・・」

総一「・・・なんか、俺達が悪役みたいだな」

総一の呟きをよそに、身動きがとれなくなった麗佳。桜姫は更に攻撃を繰り返す。

桜姫「渚さん」

渚「は、はひゃい！？」

とってもイヤな予感が頭をよぎったのだろう。その声は裏返っていた。

桜姫「あなたは最近、目元の小じわを気にしていますね」

渚「ぎ、ぎくっ！？ど、どうして・・・じゃくつてえ」

なんとか踏ん張った渚。

渚「わ、私はそんなの気にしてないよぉー！」

虚勢を張りつつも、体勢を整えようとする渚だったが、更なる追撃が待っていた。

桜姫「この間、あなたのバイト先のファミレスでイベントがあって、その際写真を撮られそうになって、すっごく慌てたよね？」

渚「ええっ！？なんで知ってるんですかぁ〜？？」

総一「優希……。それ洞察力って言わないぞ」

どこから仕入れたんだ、その情報。そもそも住んでいる場所さえ全く違うのに。

桜姫「もし写真に小じわが目立ってしまったら、なんて考えて、こっそり化粧を直しに行ったわよね？」

渚「う、あ、う……。」

2人はそう言うが、総一と麗佳が見る限り、一体どこに小じわがあるのか、まるで見当がつかなかった。

そしてトドメを刺さんとはかりに言葉を続ける桜姫。その表情は至極真面目だったのだが、それが返って恐怖感を増す結果となっていた。

桜姫「そんな渚さんの年齢は、今年でにじゅ」

渚「！それを言っちゃダメですう〜！！」

必死でその先を止めようと、機関銃で応戦しようとした渚。一瞬だが総一から注意が逸れてしまった。

総一「おりゃあ！！」

総一は持っていた謎のドアを、開いたまま渚達の方へと投げつけた。

麗佳「えっ！？きゃあっ！！」

そのドアは、スッポリと麗佳達を覆ってしまう。

渚「もしかして、私達の負けなのぉ？」

ドアに上半身をつっ込んだ状態で、渚は泣き顔になる。既に上半身は姿かたちが見えなくなっていた。

麗佳「・・・人気投票1位・2位ペアなのに」

その言葉を最後に、はるか彼方へと姿をくらました2人。あつけない気もするが、あの激しすぎる攻防の後では、仕方ない事だろう。

桜姫「一つ聞いていい？」

総一「ん？なんだ？」

一応勝利者となった総一に対し、桜姫が尋ねる。

桜姫「今の行き先ってどこなの？」

総一「え？あー、えっと・・・」

なぜか言いよんでいる総一。桜姫は直感で逆に指摘した。

桜姫「まさか、また私の部屋なんて言うんじゃないでしょうね？」

総一「いや、そうじゃなくって・・・」

言葉を濁していたが、ようやく一言ポツリと漏らした。

総一「咄嗟だったから、行き先指定するの忘れた」

桜姫「・・・はい？」

意外な答えに、言葉が詰まる桜姫。

総一「あの2人がドコに行ったのか、俺にも分からない」

そう、彼女達がどこに向かってしまったのか、それはこの世の誰にも分からなかったのだ。

つまり、行方不明となったのだ。

総一「なむ」

桜姫「こらっ！ 拜んでんじゃないの！！ 責任とりなさいよっ！？」

何はともあれ、これで残されたペアは3組。既に半分以上が脱落した事になる。

逆に言い換えれば、残されたのは強敵ばかり、ということになる。

郷田「そう、そして今度は私達が相手、ってことよ」

桜姫「そこに現れたのは、なんと例の年増女だった」

郷田「って、コラ！とんでもないナレーションを勝手に作ってんじやないわよっ！」

咲実「因縁の対決、再びですね。桜姫さん」

桜姫「・・・そうね。次も負けないわ」

・
・
・
・
・

第4話「もはや常識さえも破壊して」(後書き)

今度は一体どのような戦いが待ち受けているのでしょうか。そして、料理者となるのは・・・？

今回は第5話「戦いの果てに」いよいよ決着の時が、乞うご期待

ちなみに

かれん「お姉ちゃんが落とし穴に落ちちゃった・・・」

真奈美「渚も行方不明になっちゃった・・・」

などと口にしつつ、湯のみに入ったお茶をずずずつ、と飲んでいる2人。

言葉にこそ出さなかったが、その様相は、何が言いたいのか、読心術の心得がなくても明らかだった。

かれん・真奈美「ま、いつかあ」

すると、地面の底から、呪われたような声が響いてきた。

かりん『よくなあーいつ！！？』

姉の一喝も、妹のかれんは涼しげな顔だった。

かれん「お姉ちゃんはどんな時でもツツコミを忘れない、律儀な娘

でした」

かれん『でした、って何よ！？いいから早く出してえー！』

彼女達以下8名がどうなったのか、それも一番最後に紹介されちゃいます

第5話「戦いの果てに」（前書き）

第5話「戦いの果てに」

作者：

桐島成実

参加者ペア一覧 残り7組中3組

『ハイパーゴールデン幼馴染カップル』 エーススピード【御剣総一】
& エースハート【桜姫優希】

『ベストバイプレイヤーズ』・・・ツークローバー【葉月克弘】&
ツードイヤ【陸島文香】

『リアルキラークイーンズ』 ジャックハート【姫萩咲実】& ジャック
クダイヤ【郷田真弓】

第5話「戦いの果てに」

総一&桜姫ペアと対峙している咲実&郷田ペア。際立った闘志を燃やしているのは、桜姫と咲実の2人だった。

総一「な、なんか、すごい気迫だな・・・」

2人の間の空気が、ピンと張り詰めていた。

咲実「一応ですけど、お互いに名乗っておきましょうか？」

暫くの沈黙の後、軽く挑発するかのように、咲実はそう切り出した。

桜姫「そうね・・・では！」

と言って、なぜか決めポーズを取り出す。

桜姫「明るく元気で活発な、正統派ヒロイン！春をイメージさせる『桜』と、一国の王女を意味する『姫』。愛しきパートナーに恋人として認められた私は、天下無敵！！怖いものナシ！！」

最後は、傍らに居る総一の腕を、しっかりと組んだ。

総一「な、なんだよそれ・・・」

呆気を取られている総一とは違い、すべてが完璧に決まったと自信たっぷりに視線を浴びせる桜姫。

咲実「・・・それは違いますね」

そうキツパリと否定する咲実。その言い方は低く鋭かった。

咲実「ある時はバラのように気高く、ある時はナイフのように鋭く、またある時は炎のように狂おしく、哀れな女を完膚なきまでに撃ちのめす！」

桜姫「哀れな女！？それって私の事！？」

咲実は返答しなかったが、その流し目が的を得ている事を暗に示していた。

郷田「今までのエピソードから考えて、どう考えても哀れなのは咲実ちゃんの方だと思うんだけど？」

何気にキツい指摘をする郷田の台詞も、今の咲実には聞こえていなかった。

咲実「その様はまるで己が命をかえりみぬ、戦場のマタドールで危うくも激しい、『デス・ジョーカー』の異名を心の奥底に刻まれた、戦乙女！この私の手にかかれば・・・」

いつ終わるのかと他の3人は考えていたが、ほとんど自己陶醉にしか思えない咲実の自己紹介は、まだまだ続いた。

咲実「悪魔じみた破壊とカオスをこの世に生み出す、その生き様は『グインディノワール』すなわち「黒き暴風」という崇高な異名で呼ばれるほどの脅威と美貌を持ち」

郷田「ああもう！いい加減になさいな！」

とうとう耐え切れなくなった郷田は、強引に咲実の口をシャットアウトする。

桜姫「長すぎて聞くに堪えない自己紹介ね。私をもっと良い名前を考えてあげましょうか？」

咲実「なんですって！！融通の利かない頑固ババアのくせにっ！！」

先ほどの浮いた台詞とは打って変わって、罵詈雑言の数々が、次々と飛び出した。

桜姫「ば、ババアって何よ！？あなたとは同い年のはずでしょ！？」

咲実「あなたの考え方が古臭くてババアだっって言ってるんですよ！」

桜姫「あなたの方こそ、いつつもいつつも総一の後ろでブルブル震えているだけの、役立たずの背後霊みたいな存在のくせにっ！！」

咲実「言っではならない事を言っしまいましたね！？」

激しく火花を散らし、罵り合う2人に対し、完全に冷めた（というか疲れた）表情を見せる残り2人。

郷田「はあゝ・・・」

いまだ牙を向き続ける2人を見かねた郷田は、深いため息をついてそっぽを向いた。

総一「とりあえず俺はどうしたらいいんだ？」

無理に止めようとしても、頑固な桜姫を言い聞かせる事は到底無理だと、過去の経験で痛いほど理解していた。

と、言うより下手に関わりたくないというのが本音だったりする。

仕方なくだんまりを決め込んでいた総一だったが、それは突如聞こえてきた。

??「その勝負、待ったあー!!」

総一「えっ？」

声はすれども姿は見えず。総一（と郷田）は、あたりを見渡す。しかし、やはり人の姿は見えない。

??「2人の決着は、この私が預からせてもらいますっ!」

と言って、間髪入れずに、次の変化があった。

ゴゴゴゴッ

突如部屋の床の一角が開き、そこから何かが上昇してきた。

かれん「ジャジャーン!!! かりんの妹のかれん、ここに惨状っ!!!」

真奈美「かれんちゃん、字が違うよお？」

かれん「あ、間違えちゃった。ええと、ここに参上っ!!」

突如出現した2人は、備え付けられているイスにそれぞれ座り、優雅に事を構えていた。

テーブルも中央に設置され、そこにワイン（つぼく見えるジュース）が注がれたグラスが2つ置かれている。

明らかに、くつろいでいたとは思えない。

桜姫「あなたは・・・、かれんちゃん!？」

突然の大胆すぎる登場の仕方に、完全に毒気が抜けてしまった桜姫。

かれん「お久しぶりです、優希お姉ちゃん!」

そんな桜姫に対し、律儀にお辞儀をするかれん。

真奈美「ええと、初めまして、でいいのかな？」

総一「ええと、あなたは？」

真奈美「麻生真奈美と言います」。あ、それですねえ、今回の対戦ステージは、こちらになります」

と言ったと同時に、総一達の後ろの壁が動き出した。

・
・
・
・
・
・

かれん「おったのしみい！えくすとら、げいーむ」

と、高らかな宣言と共に始まった戦い。総一達4人は、用意されたイスに座っており、その前にはテーブルと、その上にボタンみたいなのが設置されていた。

かれん「今回の戦いのテーマは、ずはりっ！」「総一さんをよく知っているのばどっちだ！」ですっ

どうやらかれんは、司会役のようだ。身振り手振りで一つずつ説明していく。

かれん「これから、総一さんに関するクイズを出題しますので、分かった方は、そのボタンを押して答えてください」

真奈美「多くの正解を得た方が、優勝となります。ただし、不正解の場合は減点となりますので、注意してください」

真奈美はアナウンサー役なのだろうか？

郷田「・・・ちょっといいかしら？」

すると、今までコメントを控えていた郷田が、突如切り出した。

かれん「なんででしょう？」

郷田「これって、そもそも私は関係ないんじゃない？というか、既にペア対決という基準から外れているわよね」

郷田の指摘に対し、かれんはただニツコリと笑い、一言述べた。

かれん「パートナーの咲実さんを信じてあげてください」

郷田「……」

答えにはなっていないが、本気で訴えかけようとも思っていない郷田は、咲実に一任することに決めたようだった。

かれん「それではげーむすたーと、ですっ」

真奈美「では、第1問目！」

そう言ってプラカードを取り出す真奈美。

真奈美「問1：総一さんが愛用しているトランクスの色は？」

総一「ちよつと待て！？」

いきなりなんて事を言い出すんだ、この人は！？という総一の悲鳴をかき消す勢いで、ボタンが押される。

ピンポン

桜姫「はいっ！」

かれん「では、優希さん」

桜姫「真っ黄色ー！」

かれん「せいーい」

正解のコールと共に、派手に鳴り出すブザー。

ピンポンピンポン！！

総一「ちよつと待たんかいつっ！！」

なんちゅー事を出題して、ってか、なぜそれが正解だった分かったんだ！？

真奈美「では、優希さんに10ポイント追加です」

咲実「くっ、まだまだこれからですよ！」

総一の疑問と悲鳴は完全に無視され、無情にもクイズは続く。

真奈美「第2問目！」

真奈美「問2：総一さんの過去にあった、恥ずかしい失敗談とは何か？」

総一「お、おいつっ！？」

これまたとんでもない事を出題、という悲鳴じみた声を言い切らないまま、ボタンがそれぞれ押される。

桜姫「はいっ！えと、総一は、過去に階段につまずいて、頭をぶつけたことがあるっ！！」

咲実「私も！御剣さんは、以前学校のプールの授業で、誤って床を滑らせてしまい、プールへ真っ逆さまに落ちたことがありますっ！！」

これは何だ？手の込んだイジメか！？と、叫ぼうとしていた所に、冷めた表情の郷田が、嫌々ながらもボタンを押す。

どうやら、一応ゲームに対する意欲は、わずかながらあったようだ。

郷田「そうねえ、バナナの皮を踏んづけてすっころんだことかしら？」

先の2人と違い、明らかに答えが適当な思いつきだった。

かれん「みなさん、せいかいでーす」

ピンポンピンポン！！

真奈美「それでは桜姫さん、咲実さん、それと郷田さんにそれぞれ10ポイントずつ入りまあす」

郷田「せ、正解したの??」

郷田はまじまじと総一の方を見る。すると総一は顔を真っ赤にしてうつむいていた。

総一「な、なんで皆知ってるんだ?? 優希はともかく、咲実さんや郷田さんがなぜ?。」

郷田「はあ、意外ねえ・・・」

とても、幾多ものゲームを勝ち抜いてきた主人公とは思えないドジっぷりだと、郷田は率直にそう思った。

真奈美「それでは第3問目!」

総一「まだ続くのか・・・?」

もうやめて、と叫んだところで止まらないだろうという事は、他ならぬ総一自身が、よく理解していた。

両サイドと、目の前に恐ろしい女性達が揃っているからだ。

真奈美「問3: 総一さんは、いくつものエピソードで、様々な女性を手籠めにしてきた女つたらしですが・・・」

総一「ま、待ってくれっつ!!?」

総一は本日何度目かの悲鳴と共に、心の中で涙を流し続けていた。

・

・
・
・
・
・

真奈美「ええと、ここまでの成績を説明しますと、27問が終了した時点で、優希さんが150ポイント。咲実さんが140ポイント。郷田さんが20ポイント」

郷田「私のは外してもらって良いわよ」

時間にして、かれこれ2時間ほど、このクイズは続けられていた。

完全に意気消沈して、ぐったりしている総一。欠伸をしてほとんど一連のやりとりを聞いていない郷田。

桜姫と咲実も、さすがに疲れがたまってきたのか、どこか表情に疲労が窺える。

真奈美「それでは、第にじゅ・・・ええと、まあ、何問題でもいいっかあ」

真奈美「問：総一さんが、今度の人生を共に歩んでいくパートナーとして、ふさわしいと思っているのは誰でしょう？」

出題が言い終わらない内に、ボタンが激しく何度も押される。

桜姫「はいっ！それはもちろん私よっ！」

咲実「違いますっ！私に決まっています！」

桜姫「くっ、ぬぬぬっ」

お互いに鋭い視線を交わす2人。それをよそに、かれんは総一に問いかける。

かれん「今回のクイズの答えは、総一さん自身に答えていただきましょう」

かれんは意地悪そうな表情を浮かべていた。が、当の本人はまるで無反応だった。

かれん「もしもあーし、総一さーん!」

総一「・・・ふえ?」

魂が抜けていた総一は、呼ばれた事によやく気づいて、変な声を挙げる。

かれん「ですからですねっ!? あなたの将来のパートナーとして、ふさわしいのは一体誰なのか、と聞いているのですよ!」

総一「ば、パートナー?」

どうやら出題の部分から聞いていなかったようだ。

かれん「そうです。要はあなたが一番好きで信頼出来る人を選べばいいんですよ」

総一「それなら・・・」

やっぱり優希しか居ないな……。少なくとも総一はそう考えていた。

総一「俺には優希しか」

桜姫「待つて、総一」

意外にも、その答えを遮ったのは桜姫だった。

桜姫「その答え、咲実さんに変更してくれない？」

総一「え・・・？」

それは余りにも突然の事だった。

かれん「それは・・・、またなぜでしょう？」

桜姫「将来のパートナー、最初は私だっと思ってた」

総一と共に行動してて、すっかり忘れてた・・・。

桜姫「でも私は、もう死んでしまっているから・・・」

総一「優希・・・」

そつ。今でこそ一緒に居ることが出来る。しかしこれからそのままとはいかないのだ。

桜姫「総一を支える事が出来る人。そして、総一に相応しい人は恐らく咲実さんだと思うの」

そう言つて咲実を見る。それは今までの敵対的な目線ではなかった。

桜姫「私とあれだけ張り合えたんだもの。それだけ総一の事を思っている証拠」

咲実「優希さん・・・」

その場に居る全員が、桜姫に注目していた。

桜姫「ねえ咲実さん。総一のコト、よろしく頼める？」

それは将来のパートナーとして、総一と共に歩めるかという問い。

咲実「・・・はい！」

咲実に迷いはなかった。その返事は力強いものだった。

桜姫「総一」

桜姫は、今度は総一の方へと振り返った。

総一「な、なんだ、優希」

桜姫「これで安心したわ。もう、私もいかなきゃいけないし」

総一「え？ま、待ってくれ、優希！」

突然、桜姫の姿がうっすらとし始めてきた。

桜姫「総一も、咲実さんの事を快く思ってるんでしょ？・・・私には分かるんだから」

どんどん透き通っていく桜姫の身体。さっきまで他の人達と同じ様に行動していたのが嘘のように見えた。

桜姫「私の代わりなんて言ったら悪いけど、咲実さんを泣かせたりしたら承知しないんだからね！」

そして、桜姫の姿は幻のごとく消えていった・・・。

総一「ゆ、優希いいいつ!!?」

総一の叫びも、空しく通路に木霊した。

咲実「御剣さん」

すると、咲実がそつと総一の肩に手をやった。

咲実「きっと、御剣さんの事が心配だったから、優希さんはここに現れたんだと思います。なら、優希さんを安心させる事が出来たんですから」

総一「咲実さん・・・」

咲実「今はまだ心の整理が出来ないと思います。けれど、少しずつでいいんで、私の事を見てくださいなね」

総一「・・・ああ」

総一が動いた時、ジャラリと金属製の音が響いた。

咲実「え・・・？これは」

すると、いつの間にか総一に繋がれていた手錠が、桜姫から咲実へと繋がれていたのだ。

しかし2人はそれを不快には感じなかった。

咲実「行きましょう、御剣さん」

総一「分かった！行こう」

そう言つて2人は、新たなペアとして共に歩みだしたのだった。

・

・

・

郷田「つて、ちょっと待ちなさいな！」

すると、忘れ去られていた人物が1人、騒ぎ出した。

郷田「仲睦まじいのは良いとして、私の立場はどうなるのかしら？」

総一「ああ、居たんですか、郷田さん」

郷田「くぬう、そんなに私の存在薄かったかしら……。それにしても、まさか咲実さんに捨てられるとは思いませんでしたわ」

どこか悔しい感じがするのは、きっと気のせいでは無いだろう。

真奈美「そうですねえ。ペアとして成立したのはこのお2方ですから」

かれん「郷田さんはペア失格という事で、罰ゲーム確定！ですね」

郷田「ですね じゃないわよ！そんなのアリな訳！？」

問い詰める郷田に対し、かれんはニツコリと笑顔を振りまいていた。

かれん「はい、アリです」

そしてかれんは手元にあったスイッチを押す。

ガタン！

郷田「きゃあああっ！？」

郷田の下が床がポツカリと空き、そのまま郷田は落ちてしまう。

郷田「エピソード『7』の序盤といい、私は所詮落ちる運命なの！？」

その声も、再び閉ざされた落とし穴からは聞こえなかった。

かれん「なかなか面白い見世物でしたよ？」

かれんの無邪気な笑顔は、どこか末恐ろしい感じが漂っていた。

総一「何はともあれ、これで残されたペアは俺達ともう1組ってわけか」

すると戦いはあと1戦のみということになる。

咲実「お世話になりました。私達は先へ行きます」

そう言つて2人は前へと歩もうとしたが、それを制した者が居た。

葉月「その必要はないよ」

総一「!？」

その声は、残されたペアである葉月さんだった。

文香「私も居るわよ」

2人仲良く総一の方へと向かってきた。・・・葉月さんの顔にいくつものアザがあるのは気になるが・・・。

しかしながら、当人は何もなかったかのような振る舞いだ。

文香「それにしても、中々の活躍だったじゃない、咲実さん」

咲実「見てたんですか？」

驚きを見せる咲実に対し、文香は余裕の表情だ。

文香「ええそうよ。モニターを通してね」

総一「モニター・・・？」

それは総一には不可解な答えであった。その疑問に答えるかのよう
に、葉月は言い出した。

葉月「もう隠す必要もないかな。・・・今回のこのゲーム。主催し
たのは実は我々なのだよ」

総一「は、葉月さん達が！？」

葉月「そうさ。僕と文香くん。それとかれんさんに真奈美さん。あ
とスミス君もかな？我々が画策してこの企画をスタートさせたとい
うわけさ」

つまり、葉月達はハナから全てを見通していたというわけだ。

咲実「そ、そんな・・・。一体なぜです！」

咲実の問いに対し、くっくくと不気味な笑いを浮かべているのは葉
月だった。

葉月「なあに、たまには我々が主役になっても良いかなと思ってね。
だから他のすべてのペアを倒せば、その念願が叶うと考えたのだよ」

文香「そつ。今の所私達完全な脇役ばかりだったしね。今だって敵の大幹部みたいな位置に居るし」

葉月「けれど、それもいずれ近い内に終わる。我々の勝利でね」

それは、最後の戦いの火蓋が切って落とされた事を宣告するものだった。

かれん「そうです。再び私達の出番ですねっ」

そう言つて一步前が出るかれん達。

真奈美「ええつと、決勝戦の闘いのテーマはですねえ。「料理の味は愛の味 パートナー料理対決!？」ですう」

そう言つて、テーマが書かれたパネルを高らかに持ち上げる真奈美。

真奈美「この近くに戦闘禁止エリアがあります。そこにはキッチンも存在しますので、場所はそこになりますよぉ」

かれん「そこでペアの片方が料理を作り、もう一方が料理を平らげる、というものです」

一通りゲームの詳細を説明している真奈美であつたが、意外にも一番動揺しているのは文香だった。

文香「ちよつと葉月のおじ様」

文香はボソボソと葉月に耳打ちしてきた。

文香「なんで料理対決なの？私の料理が壊滅的だって知ってるでしょ！」

葉月「ふっふっふ。だからなのさ」

慌てる文香に対し、葉月は大人の余裕だ。

葉月「キミの料理を食べてこそ、真のパートナーと呼べるものだよ」

文香「それって、微妙にひどくありません？」

一方、比較的落ち着いているのは咲実だった。

咲実「私、料理にはちょっと自信があるんですよ」

総一「俺は作らなくても良いのか？」

咲実「私に任せておいてください！」

しかし、この料理対決の行く末は、あまりにも凄惨なものであった。

もちろん、そのを予想していたのは、この場には居なかった。ただ1人を除いては・・・。

・

• •
• •
• •
•
•

第5話「戦いの果てに」（後書き）

いよいよ決勝戦が開幕となります。残されたペアの内、勝利を得るのは一体どちらか！？

次回は最終話「真のパートナー決定！？」いよいよすべての決着がつきます。そして脱落したペアは一体・・・？

第6話「真のパートナー決定!？」（前書き）

最終話「真のパートナー決定!？」

作者：桐島成実

参加者ペア一覧

『新生・騎士と姫君逢引ラブペア』 エーススピード【御剣総二】
& ジャックハート【姫萩咲実】 VS 『超・ベストバイプレーヤーズ』
・・・ ツークローバー【葉月克弘】 & ツーダイヤ【陸島文香】

第6話「真のパートナー決定!？」

残り2組となった総一達4人は、舞台となるキッチンが設置されているエリアへと立ち入っていた。

総一「うわっ、色んな食材があるな」

キッチン横の大きなテーブルの上には、古今東西の色とりどりの食材が、所狭しと並べられていた。

かれん「ルールは先ほど述べた通りですから、さっそく始めましょうか」

その言葉を合図に、総一&咲実ペアは咲実が、葉月&文香ペアは文香が、それぞれ料理を開始した。

真奈美「あ、あのお。かれんちゃん」

すぐ脇に控えていた真奈美が、かれんにそっと耳打ちする。

かれん「ん?どしたのですか?」

真奈美「今回のゲーム、料理を作って、その相方が料理を食べるんだよねえ?」

かれん「そうですよ」

かれんは当然のようにつなずく。

真奈美「それで、一体料理の判定はどう行つの？」

かれんが皆に説明した内容は、真奈美が言っている以上の説明はなかった。

かれん「実は、相方がいかに美味しそうに料理を味わうか。それを私達が見て判断するの」

真奈美「あゝ、なるほど」

判断基準は、料理の美味さそのものではなく、いかに料理を美味しく味わうか。

それを総一達には知らせず、素のままの反応を窺うということなのだろう。

真奈美「でもそれって、判定するの難しくない？」

言ってしまうばリアクションが大きい人や口の旨い人が、いかにも美味しそうに振舞えば、それだけ有利になるからだ。

逆を言えばじっくり味わうタイプには不向きだといえる。

かれん「そうでもないかも」

しかしかれんはさほど心配していないようだった。

・

・
・
・
・
・

文香「やっぱり、正面からぶつかったら勝ち目はないわね」

そう言う文香の手には、フタに塩と書かれた容器と、砂糖と書かれた容器が、2つ並べられていた。

文香が頭に浮かべているのは、かつて手塚達を相手にした時に、アルコールを水増した時の事。

文香「ルール違反、じゃないわよね」

文香は2つの容器のフタを外し、フタを入れ替えて、再び取り付ける。

文香「これで、咲実ちゃんは塩と間違えて、砂糖を使わず」

あとは仕上げとして・・・。

文香「えーと、ん？これは何かしら？・・・まあ、いつか。ちょうど砂糖に近い色合いだし、適当に混ぜ込んでおけば」

そう言つて、適当な調味料らしきものを砂糖に流し込んだ。その使い道を知らずに混ぜたところは、料理が壊滅的な文香らしかった。

文香「あとは、私が料理の手順を間違えなければ・・・」

昔の失敗（当人は忘れたつもりだったが）を必死で思い出し、正しい料理方法を思い出そうとする。

文香「ええと、水をたしか、700CCだったかしら？2人前だから半分で良いのかも？」

忘れたかった記憶なので、断片でしか思い出せない。

文香「お酒が、えつと200CC。うんぐと、煮込んだ後に入れる？酢は必要だったかしら？」

記憶だけを頼りに作る文香は、もはや何の料理を作っているかさえ、理解していなかった。

・
・
・
・
・

咲実「フンフンフン」

呑気に鼻歌を歌いながら、手際よくフライパンをいじる咲実。行き当たりばったりで慌てふためいている文香とは対照的だった。

咲実「えつと、ここでこの食材を切って・・・」

咲実は包丁片手に、食材らしきものを切る。

総一「？咲実さん、その食材は？」

キッチンの横にあるイスに座っていた総一は、咲実が奇妙なものを刻んでいるのに気がついた。

咲実「ああ、これですか？」

咲実はその言つて食材を手取る。それはなんとなく所々焦げた力ボチャに見えた。

咲実「これはですね、前に拾っておいたスミスさんの残骸です」

総一「ぶつつつ!!?」

突然、とんでもない発言を聞いた総一は、飲んでいた紅茶を一気に噴出す。

葉月「わっ！そ、総一くん!？」

対に座っていた葉月は、それに驚いて飛びのく。

総一「あ、すみません。つて、咲実さん！なぜわざわざそれを・・・？」

カボチャなら、普通に用意されているんだが。

咲実「普通の食材を使つても、勝ち目があるとは思えません。ならば、特別な食材じゃないといけない気がするんです」

そう力説する咲実だが、総一は率直に普通の食材を使ったほうが良い気がした。

咲実「これでギャフンと言わせてみせますから！」

総一「いや、それ食べるの俺なんだけど!？」

ギャフンと言ってしまったら大変だ!という総一の意見は当然のよう
にスルーされてしまっていた。

・
・
・
・
・

かれん「さあーで、料理完成!ですね」

どうやら2人揃って料理は完成したようだ。

葉月「う、ううーむ・・・」

今回これを企画したのは葉月だったが、彼は今とても後悔していた。

文香くんの料理はヘタだと聞いてはいたが、それを覆す策を考えて
くれると思っていた。

それは主役になりたいという文香の信念を、葉月は共感を覚えた
と共に信じたが為といえる。

だが、現実を得てして残酷だった。

総一「な、何かものすごくいやな予感がするんだけど」

総一も、咲実の事を信じていたものの、額から汗が流れ落ちている。

かれん「それでは、お楽しみの試食たいーむ」

そう言って、総一達に食べるように促す。

葉月「くっ、ここが主役になれるかどうかの瀬戸際。主役ならば力
ツコよく決めるものさー!」

葉月は覚悟を決め、目の前にある恐らく料理だと思われる物体に箸
をのばす。

料理だと思われる、というのは。裏を返せば料理に見えないという
事なのだが。

鼻につくような異臭は、気のせいだということにしておこう。

総一「咲実さんの方はまだマシに見える。けど・・・」

グツと言いたい事を堪えて、ガツと箸でカボチャをつついて口に放
り込む。

パクッ

モグモグ・・・

文香「ど、どうかしら？葉月のおじさま」

咲実「どうでしょう？御剣さん」

顔が引きつっている文香と、なぜか自信たつぷりの咲実。しかし、暫くのち、食べた2人に劇的な変化があった。

葉月「・・・うむ、これはなかなか味が効いて・・・」

ほめ言葉はここで寸断される。

ふうつと葉月の意識が飛び、イスから転げ落ちてしまう。

文香「きゃああつ！おじ様！？」

文香はある程度予想はしていたが、卒倒するとは思ってなかったようだ。

総一「があつ！？ぐうつ！？」

咲実「み、御剣さんっ！？」

総一の方は、口に含めど飲み込めないようだった。その理由は当人しか知る由がなかった。

総一「むぐぐっ！？」

総一が言葉を発することが出来たとしたら、こう言ったのだろっ。

総一『こ、このカボチャ、口の中で蠢いてる！？い、生きているの

か!？」

だが、口の中で暴れるそれは、総一の発言を許さない。

総一「が・・・がくっ」

結局飲み込めないまま、総一は床にひっくり返ってしまう。

かれん「あらら、これは予想以上ですねえ」

この結果を最初に予想していたのは、かれんだけだった。しかしそのかれんも、意識を失うほどだとは思ってなかったようだ。

かれん「えーと、ですね。こういう結果になりましたので・・・」

かれんは咲実達の方へと向き直る。

今回の最強なペアが決定しました!今回の優勝者は・・・。

ジャジャーンという音楽と共に、ペアの2人のスポットライトが当たる。

かれん「咲実&文香ペアのお2人でえーす!!」

文香「ええっ!？」

咲実「えええっ!？」

2人は驚きの声をあげる。

かれん「人を一撃必殺でぶっ倒すほどの威力。それは正に最強といえる料理でした。それらを見事作ったお2方に拍手」

パチパチパチ・・・

モニター越しに、誰かの手を叩く音が一斉に聞こえてきた。

文香「こ、こんなハズじゃ・・・」

咲実「せっかく御剣さんと一緒になれたのに・・・」

2人は悲しむようなそうでないような複雑な表情をしていた。が、目の前で倒れている2人の事は眼中にないようだった。

総一「だ、誰か救急車・・・」

総一の助けも、咲実と文香には聞こえていなかった。

・
・
・
・
・
・

かりん「だ、誰かここから出してよぉ」

助けを求めていたのは、何も総一だけではない。

優希「ううゝ、臭い、臭いよぉ」

優希は身動きがとれない状態で、必死に鼻を押さえようとする。と、
いっても顔はかつてのスミスのままだったのだが。

かりん「何で落とし穴の果てに、大型ゴミの山が置かれているのよ
っ!？」

今2人は、ゴミの山の中に完全に埋まってしまっていた。落ちた瞬間は、クッションによって衝撃をモロに受けなくて難を逃れたが、
それもゴミの1つに過ぎなかった。

かりん「いちいち解説しなくて良いから、早く救助おっ!？」

・
・
・
・
・

麗佳「一体ここはどこだって言うのよ!？」

ヒステリックに叫ぶ麗佳の声も、吹き続ける吹雪によってかき消される。

渚「進んでも進んでも雪の道……。もしかして、ここ日本じゃないんかもっ」

2人はかれこれ6時間も、吹雪の中をさ迷い続けていた。

麗佳「も、もうダメ……」

麗佳はその場に倒れてしまう。薄着のままここまでこれたのは奇跡。いや、強靱な精神力のおかげなのだろう。

渚「私もおゝ。うう、乙女の人生は短かったよおゝ」

渚の嘆きを最後に、2人の意識は薄れ・・・ようとした時。

ジリジリジリジリ・・・

突然吹雪が止み、続いて照りつけるような暑さが周りを支配した。

麗佳「え、ええっ!？」

極寒の地から一転、突然猛暑の地へと化してしまった。それは幻なんかではなく、さきほどまで埋め尽くされていた雪が、すごいスピードで溶け出したのだった。

渚「ど、どおして??」

世界中のどこを探しても、こんな極端な温度変化をする大陸はない。

麗佳「ここって、本当に地球・・・なのかしら?」

そんなはるか彼方に飛んでいく様な予想を、麗佳は首を振って否定したのだった。

・
・
・

・・・

長沢「うわあっ！？どわあっ！？どおっ！？」

長沢は障害物を避けながら、必死で走り続けていた。

高山「大型のコンベアの上に、細身のボディとカボチャが流れている。ここはスミスの製造工場か？」

高山も同様にコンベアを逆走しているが、その動きは軽やかだった。

長沢「の、呑気に状況判断してねえで、なんとかしてくれよ！」

高山「そういわれてもな」

コンベアの両端は壁があるのみ、逃げようにも逃げれない。

高山「むっ？」

逆走してもジリ貧なので、コンベアの流れに沿って走っていると、完成したスミスの集団が、きれいに一列に並んでいた。

長沢「な、なんかどこかで見たような光景が・・・」

そう、それは落とし穴に落ちる直前の出来事と被っている。

スミスRH-215号『侵入者発見！排除します！』

高山「やはりそう来るか。迎撃するぞ！」

高山はそう言つて銃を構える。

長沢「はあ、はあ。こ、こりゃ、家で大人しくしていた方が良かったかもな・・・」

高山「早くしろ！長沢！」

・

・

・

郷田「な、何なのよ、これは！？」

郷田は1人、4面を壁に囲まれて、謎の液体が満たされている場所に放り出されていた。

郷田「この液体の色、どこかで見たわね・・・」

しかしそれが何かピンとこない。

すると、壁の上の方に設置された、スピーカーから声が聞こえてきた。

明美（葉月の娘）『それはあなたの大好きな、ビールなんですよ』

郷田「！誰っ！？」

郷田の驚きも、明美には届かない。

明美『一応、かれんちゃんからお願いされたので、実行しますね』

そう言つて、明美はスイッチを押す。そこには「スタート」と書かれており、その上のプレートに、【超大型洗濯機】と刻み込まれていた。

明美『ゆっくり味わってください』

ピッ！

郷田「な、何！？ビールが渦巻き状に！？きゃあぁっ！？」

ゴウンゴウンゴウン・・・

後に響いたのは、モーターが回転する音だけだった。

・
・
・
・
・
・

手塚「何が悲しくて、服を着たまま泳がなきゃなんねえんだ・・・」

手塚と漆山は、辺り一面海の真っ只中に放り出されていた。

手塚「まったく！やたら長くて縦横無尽な落とし穴を落ちてみりゃ、海とはな」

至極穏やかな海ではあったが、どっちに陸があるか分からない。

漆山「てっ、手塚くん！？た、助けてくれえ」

するとすぐ隣で漆山の助けを呼ぶ声が聞こえる。

手塚「お、おいコラ！俺の腕にしがみつくんじゃねえ！！」

漆山「お、俺は泳げないんだあゝ！？」

手塚「アホかつ！？俺を道連れにするなあ、ボケッ！！」

ボカツ

漆山「ブクブクブク・・・」

～END～

第6話「真のパートナー決定!？」（後書き）

みんな揃って悲惨な目に遭いましたが、やはり色々おかしなお話でした。

結局の所、みんな揃って被害を被っちゃいました。なむゝ

他のエピソードと違い、短めでしたけれど、お楽しみいただけたでしょうか？

それでは、ごきげんよう また会いましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2013n/>

シークレットゲーム ～BEST OF THE PAIR～ 仮想エピソード

2010年10月9日20時42分発行